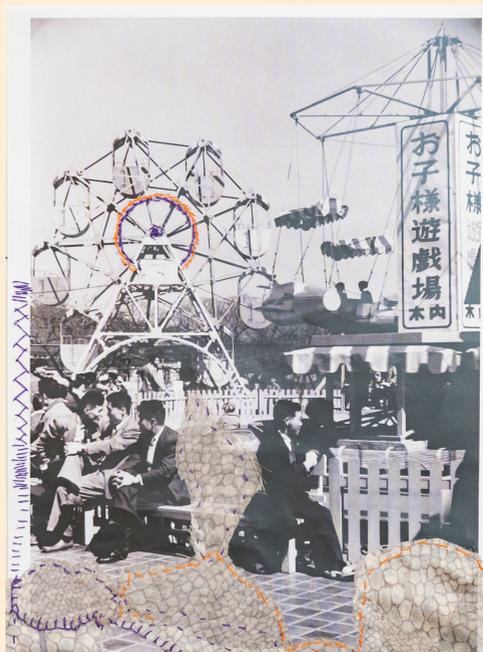


# そう SO する? SURU?

秋田 市 文化 創造 館  
AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER

リ  
ニ  
ユ  
ー  
ア  
ル  
し  
ま  
し  
た



秋田で  
物語を織る

ジ  
エ  
ン  
ダ  
ー  
さ  
ん

浮かぶごちそう  
満ちてゆく朝  
「むぎの香」

「狩猟と農耕」の

関係から

クマ問題を

考える

塩野米松

「聞き書き」

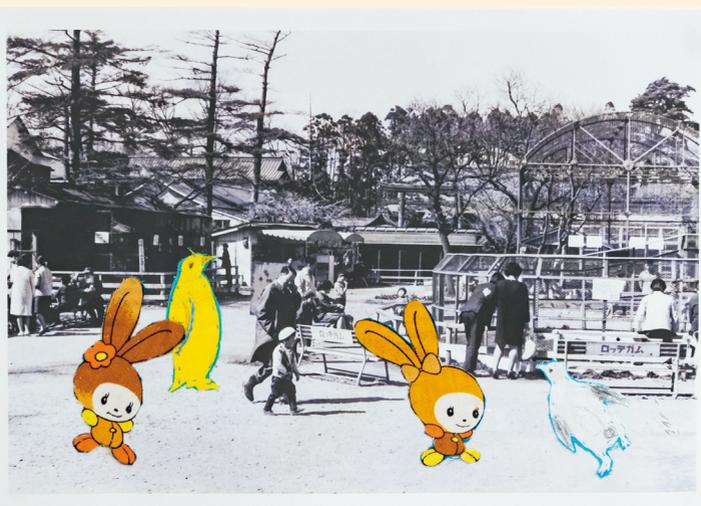
講義録

9号  
2026年3月

peer cafeが  
「在り続ける意味」

私の

ナ  
ヌ  
ー  
ク



クリエイター・イン・レジデンス2025 「風景のタペストリー」ラクミ・フィトリアニ  
成果発表より(表紙とも／→P40)

### 受付日記③ 黒木美佑

わたしは早く歩けない。雪の日はなおさら遅い。

朝、砂のような雪が降り積もって、まだわたしもないので、きれいな新雪の上をひたすら歩く。雪はさらさらと降りしきるので、真っ白になって歩いてゆく。

仕事場に着いて受付デスクに座るとき、長い旅先から戻ったみたいなお息が出る。

生まれてきて、歩くということを感じ、きょう、歩いてきた身体が痛い。不安定な雪の上を歩いてきたから、ふくらはぎと背中の真ん中が痛い。秋田の冬は、一日がろうそくの一本のように長いので、その一日を燃え尽きるように生きてゆくうちに、あれ、という間に春がくる。

階段のステップに靴裏の雪が半くずれになって点々としている。モップを持って拭きにゆく。雪は踏まれているのに、ほんとうに鮮烈。すれ違う人たちはどの人も厚いオーバーを着ていて、少しづつ、いろんなうちの匂いがする。

昼過ぎに玄関の除雪に出て、同僚は、今日の雪は積もると言うけれど、こんなに水気の多いべちゃ雪が積もるなんて、私は不思議に思う。雨雪があいませになって泥のように重たい。搔いても寄せても雪は降り積もるし、身体はくたびれるし、ただ、雪というものはままならないものであるので、手を休めてその場に立ち止まる。

見上げると、雪雲はほんとうに大きい。ワイシャツ地のように固く目の詰まった感じがする。しかしながら、空のてっぺんが明るくうらんで見えるのは、日のひかりが真上にあるのだと思う。

雨雪も、あられ雪も、砂のような雪も、ひとつの授かりなんだろうか。わたしのおじいさんは、なににつけても「授かりやわ」と言うから、わたしも考える。来る日も来る日も風雪に打たれて、わたしは、その痛みの中に恵みがあるのだと思つて凝視するけれど、まだ分からずにいる。

コートを脱いで総合案内に戻る。姿見を見たら赤い頬をしていた。席に座ると電話が鳴った。まだ冷えている手で受話器を取り、同僚に宛てた電話であつたので、取次ぎのために名前を呼んだが、そのぼつと見返つたまなざしの光にちよつと圧される。それは障子紙へぶつりと小さな穴をあけて、そこから、片目をつむつてまぶしいところをそつと覗くような、くつきりとして、それだけでやわらかな光。わたしに温度があるように、隣にいるひとも確かに生きているのだと思つた。

事務仕事をしながら、雪靴の濡れたゴム裏があたりこちらで鳴っているのを聞く。前のめりに歩いてゆく足音は刻むようであるし、ゆつたりと行く人の足音には人ひとりの体重がある。総合案内へまっすぐ進む足音が分かるので、手元をかたづけて来訪を待っている。

受付日記③ 黒木美佑 1

私のナヌーク 角幡唯介 3

塩野米松「聞き書き」講義録 6

ジェンダーさん 三浦美和子 22

私と世界の間境界線は存在しない 服部文祥 24

秋田のクマの出没傾向と対策 近藤麻実 27

「狩猟と農耕」の関係からクマ問題を考える 田口洋美 31

岩尾別の母なのか 石川直樹 35

馬を追って見た景色——福島県南相馬市小高 中須賀愛美 38

秋田で物語を織る ラクミ・フィトリアニ 40

ぼくの好きな秋田① 秋田市新屋の「わたゆう」 白田佐輔 43

「みんなで」バラして「づくりかえる」

ワークシヨップ（一緒に考える人：岩沢兄弟） 勝谷俊樹 44

執筆者プロフィール 46

浮かぶ「ちそう」② 満ちてゆく朝「むぎの香」 金子聖英 47

Beer cafeが「在り続ける意味」 古谷博子 48

## 私のナヌーク 角幡唯介

私の場合、日本のヒグマやツキノワグマより北極圏に棲むシロクマのほうがかわりが大きい。

日本の山でも年に何度か溪流釣りや狩猟で旅するのでクマと出会うことが多いが、ヒグマやツキノワグマは人間に勘づいたらほとんどのケースで向こうから先に逃げる。もともと人に対する警戒心のつよい生き物で、鉄砲をもってクマを探しても山ではなかなか見つけられないのが実情だ。

北極のシロクマの場合はややことなる。彼らは、基本的に植肉食性である日本のクマとちがってアザラシを主食とする肉食獣だ。好奇心が旺盛で、生き物の存在に気づいたら餌になるか確認するのだから、みずから積極的に近づいてくる個体が少なくない。就寝中にテントにくるものもいれば、犬糧で走っている最中に近づいてこようとすると大胆不敵なやつもいる。

おまけに私の旅の相棒であるエスキモー犬も臭いでシロクマの存在に気づいたら反射的に追いかける習性がある。向こうも近づいてくるしこつちも追いかけるわけだから、北極の旅では

## 秋田市文化創造館

AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町3-16

開館時間 9:00-21:00

休館日 火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）、12月29日-1月3日

お問合せ Tel: 018-893-5656 Fax: 018-893-5659 e-mail: info@akitacc.jp

公式ウェブサイト <https://akitacc.jp>



- アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
- 専用駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください
- 車イスご利用の方などで駐車が必要な場合はお申し出ください

【つづくる?】9号  
発行日：二〇二六年三月二日 デザイン：服部一成 挿本紗織 編集：熊谷新子

接触頻度が高くなり、体験としても濃密になる。これまで何度も、記憶から永久に消え去ることはないだろう強烈な出会いがあった。

あれは犬糧をはじめてまだ二、三シーズンしかたっていない春のことだった。白夜が本格化し、はげしい太陽光線と氷原の照り返しで全世界がまばゆくなつた五月中旬、テントのなかで眠れずにもじもじしていると、外にいる十数頭の犬たちがいつせいに喚きはじめた。

その様子からシロクマがすぐ近くにきていることがわかった私は、即座に跳ね起き、入口の吹き流しをあけて顔を出した。その瞬間に全身がかたまつた。わずか六、七メートル先に鼻の穴からもうもうと白い蒸気を吹きあげる、巨大なシロクマの姿があつた。周囲で吠えたてる犬には目もくれず、シロクマは私のほうに顔を向けてのつそりと歩みを進めてくる。

私は反射的にテントの入口においてあるライフルを手にとり、弾をこめて薬室やくしつに送りこもうとした。だが突然の襲来に

焦っていたのだろう、ボルト操作の途中で弾が薬室と弾倉<sup>だんそう</sup>のあいだにはさまり動かなくなつた。やべえ、やべえ……とボルトをガチャガチャとやるが、弾は完全にロックして装填<sup>そうてん</sup>もできないし排莖<sup>はいきょう</sup>もされない。

マズい……と思ひ顔を上げた。そのときシロクマが歩みをとめて私のことをじつと見た。私と彼の目線が交錯する。

シロクマはもうわずか三、四メートル先にいて、鼻からは相変わらずフーフーフーと蒸気が噴き出している。その気になれば瞬時に私の命をうばうことができる。

すごい迫力だつた。神の造形物として最高傑作ではないかと思える美が、そこにある。たつぷりと脂を蓄えた見事な巨体、丸太のように力のみなぎつた太い四肢、流れるように光を反射させたクリーム色の毛なみ、そして殺しが日常の肉食獣とは思えない愛らしくて小さな黒い眼――。

狂暴さと優しさが同居する、まさに自然性そのものを体現した存在を前に、ああ俺はこいつに殺されて死ぬんだな、と虚無的な心境になつた。同時に、それもいいかもしれない……という不可思議な思いが胸をよぎつた。わずか二、三秒のことだつたと思うが、その一瞬の出来事は永遠の時間に接続されていまも私の生の中心部をつらぬいている。

怖いという感情より状況にしたがうような諦念になつたのは、もしかしたらアドレナリンの分泌のような生理学的機能にたのはまちがいない。そしてあの瞬間こそが共生というものだつたようにも思う。

ほかの動物との共生ということを考えてとき、私の頭に真つ先にかぶのは星野道夫の『ナヌークの贈りもの』という写真絵本だ。

若いころは星野のえがく美しい世界がどうにも好きになれなかつたが、狩猟をはじめて再読してみると、やはり彼には自然の奥深くを流れる目に見えない何かを直観的に言葉で把握する天才的な力があつたようで、現代のシューマンみたいな人だつたのだと思うようになった。

この作品のなかで星野は、エスキモーの少年にシロクマ（ナヌーク）の幻聴を聞かせ、小さな生き物は大きな生き物に食われ、大きな生き物はさらに大きな動物の餌となり、最上位の捕食者もやがては小さな生き物の命にかわるという命の循環について語らせる。そのうえでシロクマは少年にこう告げる。

へわれわれは、みな、大地の一部。

おまえがいのちのために祈つたとき、

おまえはナヌークになり、

ナヌークは人間になる。

いつの日か、わたしたちは、

氷の世界で出会うだろう。

そのとき、おまえがいのちを落としても、

還元できるのかもしれないけれど、ただあの経験を機械論ではなく言葉で吟味してみたとき、つぎは自分の番だ、ということを私は瞬間的に受け入れたのだと思う。

アザラシやジャコウウシなど、それまでたくさん動物を狩猟し、その死を自分や犬の命に転換させて北極を何年も旅してきた。シロクマを獲つたことも何度かあつた。大きな動物の命をうばうと、こんなことが許されるのかという厳肅な気持ちになり、それが狩猟者に独特のモラルを要請する。そのモラルとは、動物の命をうばう以上、自分の命もうばれるリスクを引き受けるのが公平というものなんじゃないか、というものだ。

いいかえれば、生と死がまつたく等質、等量のものとしてひとしく循環する自然のなかに本当の意味で身をおいたときのみ、狩りは正当なものとして成立する、ということでもある。私はそれを野生の掟と呼び、少なくとも北極を旅するときは文明ではなく野生の掟にしたがうようつとめ、方法論や行動原理にこだわつてきた。ただ、それまで私の野生の掟は抽象的で潜在的な観念にすぎなかつたとも思う。その観念にすぎなかつたものが、あるときだけは神の御使いのような美しくも暴力的な姿に化身し、目の前で顕在化していたのだ。

野生の掟にしたがって旅する以上、自分が殺されるのも自然の摂理だし、散々動物の命をうばつてきたのだから、むしろ殺されるのが正しいともいえる。一瞬だつたがそんな心境になつた。わたしがいのちを落としても、  
どちらでもよいのだ

死ぬのはどちらでもいい……。あの出会いのあとに星野のこの作品を旭川のちいさな本屋でよんだとき、私は雷に打たれたような衝撃でしばらく動けなかつた。あのとときの体験の何かもやもやとした感情が、星野の詩的な感性により寸分たがわぬかたちで表現されきつている、そう感じた。私が出会つたシロクマはこの本に出てくるナヌークなのではあるまいか……？

自然のなかで命をつむぐというヒトとしての本来の生にたちかえつたとき、ヒトとクマの境界は消失し、おなじ地平で物事を考えることができるようになる。かつてヒトとクマはおなじ言葉を話していたと星野はこの本のなかに書いている。そしてその言葉をうしなつたとも。

そう、たしかに私たちはクマとの共通言語をうしなつた。でもそれはもう本当にどこにもないものなのだろうか。おなじ言葉をとりのどすことは難しいかもしれないけれど、いつか見つかると信じて、私はナヌークの声をきいた少年のように、今年もまた犬とともに氷原を旅しようと思つている。

グリーンランド北部の村 カナックにて

「聞き書きの名手」塩野米松氏が文化創造館で二日間の授業を開いた。受講者は六つのチームに分かれ、インタビュアーから文字起こし、執筆までを実習した。一日目の始まり、塩野氏による「心得」の講義は、急ぎよ質疑応答形式となった。その模様を届ける。

人が人に会って話を聞く、  
人が人に会って自分のことを話す

塩野 長いこと、聞き書きをやってきました。かなりの人にお会いして、本を作ってきました。その傍ら、この聞き書きという方法がとても面白いので、高校生だとか中学生たちに教えるようになりまして、二五年になります。二五年前から、高校生一〇〇人を東京に招いて授業をやっています。聞き書きにはあんまり「術」がないんです。すごく基本的な、人が人に会って話を聞く、人が人に会って自分のことを話すと、このことから出来る上

書くために聞く

基本は、聞くということなんです。この聞くということが、とても簡単そうで難しい。でも、誰でもが今までの人生でやってきたことです。それを、書くために聞くってどういうことかということに、集約されるだろうと思います。皆さんがお読みになったり、教科書と呼ばれているものを見たり、それから自分の中で考えた「聞き書き」というものがおありだろうと思う。

最終目標は、事前に資料を読んでいただいた聞き書きと同じような形のものを作ることです。これはどうやってできているだろうかと。どうやればいいのか。なぜこんなことになつてくるのだろうか、というような、さまざまな疑問がおありだろうと思う。それが解決されれば、基本的には、きょうと明日（二日間の講座だった）の目的が達成されます。なのでこの一時間目の授業は、皆さんからの質問に答える形になります。

まだテレビがない時代、ラジオに『二十の

家の方が、山本夏彦さんが編集の『室内』という雑誌に職人話をずっと連載してました。そのやり方が、これだったんです。

それと彫刻家の高村光太郎が自分のお父さん、高村光雲に話を聞いてまとめた『幕末維新懐古談』というのがあって。その本も、僕と同じ聞き書きのやり方をしていました。これをやってみようよと、そのときは思いませんでしたが、面白い方法だなとは思いました。今から四〇年前くらいに、雑誌の連載で、法隆寺の西岡常一棟梁にお話を聞く企画を、僕が自分で上げたのかな。お手紙を書いて、タイトルだけは決めてあった。『木に学べ』というタイトルです。奈良にお願いしに行つて、座つてお茶をいただいた瞬間に「ほな始めまひょうか」つて。西岡棟梁は大和弁です。明日から本格的に始めますので、きょうは雑談でという話をしました。

明してくれたことを、理解して、感心したり感激した言葉をどうやって伝えるかというのが今までの仕事の基本でした。お猪口で汲むよりも、今聞いているこのままの言葉をそのまま伝えられたら、そのほうが説得力があると思ひまして。前に見た、斎藤隆介さんのやり方の聞き書きというのをやってみようよと。どうやればこれができるのかを考えながら始めたのがきっかけです。

秋田市から来ました、岩沢あさみといいます。横手のコミユニティーFMでポラントイアスタッフをやっています。番組にゲストを呼んでお話を聞くのですが、どこまで相手の気持ちだとかやっていることを引き出せたかなと、疑問に感じているところがあります。今回はそこを少しずつクリアにできればなと思ひました。

どんな人かは知つて伺つたつもりですが、その話しぶりと内容を聞いていて、僕は職人にたくさん会う仕事をしてるけれども、大工じゃない。大工じゃない僕が、西岡棟梁が法隆寺をどういうふうに守ってきたかという話を聞くときに、どれくらい詳しく聞けるだろうかと思つたんです。よく考えてみたら、海の水をお猪口で汲んでるような話になるんじゃないかと。西岡棟梁はこんな人で、こんなお話をしてくださつたと地の文で説明するのが、通常の僕らの仕事でした。でも僕に説

塩野 自分としては、どういふふうにしてやるかも知らなかつた。聞き書きというものを最初に見たのは、斎藤隆介さんという絵本作

佐藤菜美と申します。仕事で社内報を作っています。聞き書きをいろんな方に伝えたいと思われたきっかけや、人に話を聞くことを始めたいきざつがありまして教えてください。

一人一人の質問に答えていくと、  
たぶん答えが出来ます

胸がどきどきしてるでしようが、授業はあなたたちのためですので、頑張つてやりましょう。

僕は、聞き書きの作品を作るのは、もちろん僕の関心を満たすためでもあるのですが、西岡棟梁の本でいえば、西岡棟梁ご自身の言葉で、西岡棟梁がどう生きて、建物のためにどんな努力をして、木を選ぶのにどんなことをしたかを表そうと思いました。あれは一年半とか二年ぐらいかかっていると思います。一生懸命、質問をしたんです。それは誰のためでもなく、西岡棟梁のためです。なので、お給料はいくらですかって聞くことも、自分の偏屈な好みでわざと聞いているのではないんです。僕が質問をするときは、自分で言うのもなんですが、たぶん、尊敬してる。お話を聞かせてくださっていることを、とてもありがたいと思っています。それは動作だから、僕の質問に、全て現れると思ってます。

僕が西岡棟梁に質問します。答えてくれます。皆さんも、きょうは同じことを行います。きょうは五人のチームで行いますが、通常は一对一で話をします。原稿を文字起こしします。そうするとその文字起こしは、「質問」「答え」「質問」「答え」という原稿に出来上がります。この後の授業でやりませんが、さまざまに工夫して、聞き手の質問を全て消して答えだけの原稿を作っていきます。これはどういうことかと言うと、初め二人は対面しました。ところが質問を消したので僕はいなくなりました。僕は、西岡棟梁を背負うか、西岡棟梁の後ろに回って支えるかして、

西岡棟梁が皆さんに向かってしゃべっている原稿を作りました。これが聞き書きの、僕がやっている基本です。なので、僕は文章には一切現れていません。だけど、僕が書いた本です。

加賀屋俊悦と申します。秋田市から来ました。高校の退職教員です。大学受験にあまり関係のない高校にいたときは、聞き書きのようなものを毎年やっていて、これはいい勉強になると思っていました。自分の興味で読んでいた本が、塩野さんが聞き書きされた本だということがよくあつて。

ここから質問になるんですけども。塩野さんのご本は、ご自分の名義で書かれたものと、西岡棟梁のような、聞き書きの相手の方のお名前で書かれたものがありますね。その線引きをどうなされているのか気になっています。

塩野 著作権の件についてまず話しますと、通常の僕の作品のほとんどは共著になっています。話し手と聞き手で出来上がっているの、僕は必ず二人の名前を書くか、場合によっては、話し手の本にしました。それはさまざまな事情があつて、一生に一度だけ本にしたい、できれば自分の名前で本にしたいと話し手の方がおっしゃったときには、構いま

せんよと。どっちも奥付のところで、「聞き手」とか「構成」という形で、自分の仕事だというのは表します。

聞き書きをして原稿を整理して、出来上がった原稿は必ず話し手に返します。許可を取った上で作品を作っています。なので、完璧に共著です。けれども、これは日本流の相手への気遣いというか、やり方というか、僕たちの基本姿勢ですね。この話をイギリスだとか、ドイツだとか、アメリカの聞き書きをやりたいという人たちに向かつて話をすると、「なぜあなたが書いたのにあなたの本じゃないのか」というふうには、必ず言います。僕はそう思っていない。話す人がいるおかげで出来ている。

お話の中身の責任は半分ずつねという意味もあります。話し手の言葉というのは、僕には責任を取れない部分がいっぱいあるんですよ。「昭和二二年に戦争が終わったよね」って言われると、明らかに間違っているけれど、二二年だと思っている理由はなんだろうかと。彼にとつての戦争は二二年だったのかもしれないというところを、聞き終わるまではこのままにしておきましょうと。それが事実かどうかとは別に、彼にとつての事実を拾うことを、僕は優先する。そういう意味では、二人で作った本という部分がとても大事です。

それから、出来上がった文章は、どう見

たつて話を聞いた人が書いた文章なのですが、自分がしゃべったとおりに全て書いてあると思つていらつしやる方たちが、たくさんあります。本当は整理されているので違うのですが。西岡棟梁は最後まで、自分のしゃべったとおりで思つていらつしやいました。それはそれでいいかなと思いましたが、ベストセラーになつて僕も豊かになりましたから。西岡棟梁は印税のほとんどを薬師寺に寄付するとおっしゃつていましたので、そのお手伝いができるならと思つて、そういうふうな形になりました。

秋田公立美術大学一年の岸本紗和です。人と話すことや、日記のような感じで自分の記憶を書き起こすことが好きなので、この二日間に興味を持って来ました。質問は、塩野さんの資料の中で、二人とも黙ってしまうことがある、それが困ることだつて書かれていて。聞き書きだから困ってしまうのかもしれないけど、沈黙の中にも対話があるんじゃないかなと思つていて。黙つたからこそ、次の展開が生まれることがあるのかなつて。私の中でそこがまだこんがらがっているの、塩野さんの話を、この点に関して聞きたいです。



黙ると、話し手が黙る。そのまま次の答えを待つてもいいですが、僕は聞き手なので、僕に沈黙の責任がある。意味のある沈黙というのはたくさんあります。感極まつて泣きそうになつて言葉を飲み込もうとしたり、相手がその話の答えを断ろうとして、一生懸命、努

力したりすることがあります。

『角館に生きる』という聞き書きをやったときに、満州で家族を失った人に話を聞きました。その方は兵隊に取られたのですが、負けてソビエト兵が入ってきたときに、どうするか悩んだ末に友人たち五人を誘つて馬で脱走するんです。食料も何もなく、最終的には彼一人だけが生き残り日本に帰ってくるのができた。奥さんたちや子どもさんたちはどうやつて帰つてこられたんですか。聞いてたら、全員殺された。で、沈黙。しばらくたつてから、ここから先はしゃべりたくない。失礼しましたと言つて次の話に移りました。そういう沈黙もあるんです。

あなたがおっしゃるとおりに、沈黙には意味があります。ただ、僕のやつている聞き書きでは、沈黙はないことになるのよ。笑いは時々、(笑)とか(苦笑)と入れる場合がありますが、(沈黙)は入れたことがないので。今まではそこを扱つたことがないです。

その沈黙をどう生かすかは、これからあなたが考えてください。やつてみると、なるほど沈黙が来てしまったなということが、実際にあるでしょう。それを生かすも殺すも、あなたの今までの経験と、発言するということの意味を、自分でかみしめれば答えが出ると思っています。

秋田市の長岡谷博資といいます。きょう来たのは、人に伝えるということが難し

塩野 基本的に、僕は聞き手です。聞き手が

いなくていいか。特に日常の暮らしの中で伝えたいことは、全然伝わらないうちに過ぎていってしまう。塩野さんの「本を何冊か見て、日常で伝わらないことを浮き上がらせておきたい」と思いました。私は別に書く仕事ではありませんが、人と会って、伝わったりするものを、ちょっと耕せるかなと。今、対話とか、傾聴とか、人の話を聞く必要性がよく言われている気はするんです。でも逆に「ごく足りない」という思いがありまして。その点、塩野さんはどう思われていますか。

**塩野** ここから先の僕の答えがどういう意味になるか分かりませんが。僕はたぶん、他人に対してとても興味を持つている。どんな話でもこの方から聞けば面白いに違いない。会って嫌なやつだとは思ったけれども、会わなきゃよかったと思っただけはほほほ。これまでも、たいていの話には面白いところがあった。誰に会ってもそうだろうと僕は思っている。

一番嫌なのは、自慢する人と、自分のことだけを滔々としてしゃべる人です。やつぱり苦手なんです。高校生たちにそのときはどうすればいいですかって聞かれるので、鉛筆を落とさない。それが僕の教えられる術です。もしくはお茶をこぼさない。時間が止

ます。私は少しずつエッセーとかを書いて、集めたものをKindleとかで発表したいなと思っています。でも、自分の中にあることを全部書くと、これちょっと嘘に思われるとか、こいつただの格好付けに思われるなということが割とあって。全部出せないなあって思っています。そういう場合は言葉を選んで、消したりして、書き足していくんですけど。聞き書きって相手があってやるものじゃないですか。例えば聞き書きでもそういうことが起きてしまった場合、塩野さんはどういう対応をしていますか。

**塩野** とても難しい質問をなさっているんですが。まず、作品というのは個人のもので、作品を発表すること自体は、何かを知ってもらいたいという意志がなければ発表しないと思うんです。エッセーはとも面白く、俳句ともどこか似ているんじゃないかと思えます。文章は全てそうですが、必要なのは観察力です。日頃の動作とか、散歩して歩いているときに何かに気付いた、そのことを文章に書ければ、一本のエッセーができます。なので、訓練していくと、写真家です。どういう構図でフレームをとるかが一番大事なところですね。日常生活のどこを切り取ったら感動を生むだろうか、美しさを生むだろうか、悲しみを生むだろうか。この枠を

まった状態になるので。自慢話を聞き書きで完成させると、読む人が嫌な気持ちになるんです。なので、自慢話は削る。なぜならその人を尊敬してお話を聞いているので、この人は素晴らしい人だっと思われよう原稿をつくる努力はします。

奈良の瓦屋さんにお話を聞きに行ったことがありました。その方は、お師匠さんとのやりとりについてたくさんお話しになった。その師匠を超えたいという思いがきつとすぐある人だった。その一つが、長いパンを、おまえは丸ごと食べるかって聞かれて、食えまっすって食ってみせたのが、自分が一番得意だったって話でした。これはどう扱おうかと思つて、最終的にはその文を消したんです。こんなことで威張つたら、損するよと思つた。そのやりとりを三回しましたかね。必ず書き足してくるんです。結局、その本に残っています。

職人たちに話を聞くときは、いつでも、朝ごはんの話を書きます。職業によつて、朝ごはんって結構違うんですよ。とつても面白いです。例えば、備長炭を作っている炭焼きさんなんかは、和歌山あたりだと、朝ごはんに茶粥です。早く、たくさん作られて、水分が補給できて、塩分も補給できる。お茶は自分の家の畑で作つた自家製のお茶です。仕事の途中でも走つてきてかき込むことができます。些細なことでもみんな聞くんです。些細なこ

どうやつてつくるかは、日常生活での観察力と、自分の意識の問題です。基本的には、人のことを書きます。自然とか木のことを書いたとしても、そこに映し出されている自分や人を書いているのです。それを見ていたあなたのことを書いています。なので、聞き書きの基本は、お話をすることです。しゃべつてくれる方は、普通は素人です。聞かれなければ考えなかつたことが質問されます。大工さんに鉋かんなはどうやつてかけますかと聞くと、大工さんはじつと考えます。そんなことを言葉で考えたことがない。「じゃあどんなふうに立ちますか」って聞くと、立ち上がつて、「こうかな」「両足をそろえるんですか」「いや、ちよつと左足を後ろに引くかな」「力を入れて引つ張るんですか」「力は入れないな」「押すでもない」「手が浮いてるでもない」というような言葉を生み出す。それは、質問されたから答える。質問されたから考えるんです。彼も初めて、鉋をかけるってどういうことだろうと考へて、言葉にして、自分でもそういうことなんだと。本になつたときに、これで合つてますかかって聞くと、そのとおりでよ。「俺、こないだ立つてやつたもんね」つて。

なので、人に会つて真剣勝負でお話を聞く。冗談半分とか、聞き流して終わるのではなく、最後は作品に仕上げるという覚悟で

とが本が出来上がったときに後世の人たちにとても役に立つ。

大事なこと、偉い人たちの話じゃなくて、日常生活がどう送られているかということ。茶粥だつたよ。それどうやつて作るんですかみたいなこと、茶粥のお茶を入れる袋の作り方も聞きます。自分でも実際に作つてみるほどと思つたけれど、お茶のパックをさらして作つてあつて、真ん中あたりを引つ張ると閉じるように出来ている。それがよく工夫されていて。袋をそのまま茶粥の中に入れておくとお茶の色が出てきて、香りが出てきて、捨てる時も楽だということ、彼は当たり前だと思つて言うけれども、僕はそれを聞いてすごく驚いて、喜んだ。なるほど、ちよつと絵を描いてくださいよとかいうやりとりが信頼感を生む。

自分は何も話すことはない。普通の人が。普通の人以下だつてみんな言いますが、しゃべると、それぞれ意味のある人生を送っている。それを僕に話してくれて本になつたときに、俺の人生もまんざらじゃなかつたかもしれない。振り返られることが多い。そういう意味でも、些細なことの話のやりとりというのは何かを生む。コミュニケーションという意味でも、たぶん、大事なことだろうと思えます。

秋田市から参りました工藤サトミと申し

聞くときには、そこにいろんなものが生まれてくるし、教えられることが多い。

由利本荘市から来ました津野朋恵と申します。実家が事業を営んでいるんですけども、個人店や企業さんを応援したいという思いで、五六店舗、聞き書きのようなことをさせてもらつたことがあります。どうしても自分主観の、私から見た相手という書き方しかできなくて。塩野さんの文章を読んだときに、塩野さんが存在してなくて、その方が話しているように読めて、どうされているのかなと。

先ほど西岡棟梁については一、二年、時間をかけてインタビューされたと同つて。他はどのくらいの時間をかけられているのかとか。それと知識のない分野もあると思いますが、そういう場合は事前にどのくらい資料を読み込んでいるかとか。雑談しながら相手の話を引き出しているということでしたが、話しやすい場をつくるときに気に掛けていることとか。

あとは、私自身、そういう企業さんの紹介の文章を書かせてもらったときに、世に出すのが怖くて、やると決めたから出して、周りからも割と好印象は得たんですけど。それでもその後まだ、何かを出すということに怖いと思つている

自分がいて。塩野さんはどのように感じながらやられているのか伺いたいです。

塩野 質問がいつばい重なっているのですが、一つずつ整理しますね。作品にかける時間は、作品になり得るまで聞き終わったかどうかです。西岡棟梁のときは雑誌連載でしたので、聞きに行ったら、一、二週間以内に原稿にして渡さなきゃいけない。なので、結構、大変でした。通常は文庫本とか単行本にして出すのが僕の仕事で、雑誌連載をまとめるやり方は、雑誌のときにやったままを使うか書き直して作るかによりますが、出版社は基本的に連載をそのまま使わせてくれということが多い。自分の納得がいくまで聞いてからやる原稿には、とても時間のかかるものがあった、聞いたのに納得がいかず出来ないものもあります。

日本刀の本、出たのは五年前くらいになるかもしれませんが。左利きの刀鍛冶だけ三人いたんです。その方たちは同じお師匠さんの元にいた。鍛冶屋というのは、鍛冶場の構造が右利き用にできています。左手で鑪を吹くようにできている。だから反対の人はどういふうにするんだろとかか、左利きと右利きでは、最後の柄の部分のやすりのかけ方の方向が違うので、それで分かるらしいんです。そういうことがあって、三人の左利きの、いずれ人間国宝になるだろう、無鑑査と

職人をやりましたが、それは手仕事の人たちと日本人という問題に、深く思い至ったので。一人はこういう意見だった。でもたたくさんの職人さん、手仕事の人に会ったら、何が覚えてくるのだらうと、自分のためにやりました。でも同じ思いの人が読者について、僕の本を買って続けてくれるんだらうと思います。

ちよつと遠回しな話し方になりますが、僕の大学は飯田橋にありました。山手線の輪っかの真ん中あたり、お堀の横です。その大学に世田谷から定期券で通っていました。飯田橋の隣が水道橋駅という後樂園のある駅なのですが、そこで降りると、神保町に歩いて行けるんです。僕はオタクみたいなものだから、授業が暇になると神保町に行つて古本を買つて、一〇〇円の棚をあさつて風呂敷に包んで帰るといふ。僕、今、七八歳です。六〇年前の話です。

帰りに水道橋の駅で切符を買います。硬い切符でした。それに駅員がはさみを入れてくれる。僕は世田谷の成城という駅で降りたけれど、降りるときには定期券で降りるので、僕の家で切符がたまるといふ。はさみを入れた切符です。それは日記代わりに使えて、何日の何時に神保町に通つたという記録として輪ゴムで留めて、机の引き出しに入れてあった。それが一〇〇枚ぐらいたまつて輪ゴムで留めてある。横から見ると切符をはさみで切つた跡が模様になって見えるんです。

いう資格の方たちに話を聞き始めた。結果的に七年かかって、そのうちの一人の分だけ本にしましたけれども。納得がいかない部分があつて、出来ていない本もあります。

不安に思つて作品を発表するときの基本ですが、なんのために文章を作つて、なんのために発表するのかが曖昧だと、常に人のため、それから企業のためなら、「ため」の部分に対する報酬をもらつてるとすれば報酬のためだよ。僕自身が作つていては、僕と話してくれた彼のために作つていては、僕のことを受け入れられるか受け入れられないかは、結果が出てみないと分からない。なので、自信を持つて出すとしたら、自分に対する自信ですね。後になつてもう少し聞き足せばよかつたなと思うこともあるけれども、出版の時点で曖昧なままは本にしないし。通常の能力のある編集者なら、読めばこのままで出せないつてたぶん言います。その決済までを全部一人でやつていると、心配なまま出すことになるかもしれませんね。

大館市から来ました。丹波桃子と申します。フリーランスライターをやつております。例えば雑誌ですとかインターネットの記事でも、どういう人が読むのかをはっきり決めて企画をしていくことが多いと思います。聞き書きの本を出されるときは、どういう人がなんのために読

さまざまに明かりの付いたビルの窓を外から見たときに、クリスマスツリーに見えるようにするのと同じ。それは一つ一つ刻みを入れたはさみの跡です。

僕たちの聞き書きも、一つ一つの作品は、一人のことしか言つてない。それを輪ゴムでまとめる、模様になつたり、日本人論が見えたり、社会とか歴史とか時代とか地方が見える。これは面白いもんだなつて。みんなで聞き書きをやれば、いろんなものが見えてくるに違いないと思ひました。

僕が角館町、まだ市になる前に町長から頼まれたのは、町勢要覧でした。角館の町を説明するのに、「こんな人たちが生きていくところですよ」といふ本を作つてみたらどうでしょうと提案しました。僕が聞き書きをやりますと。それが議会を通つて。魚屋さんとか、酪農家もいたかな。お医者さんもいたね。角館でよく出会う二〇人以上の話を聞いて『角館に生きる』という本を作りました。

全戸配布されたので、それを読んで、あの八百屋さんはこんな人なんだとか、魚屋さんのおじさんはこんな経歴があつたんだということが分かると、町の風景が変わるんですよ。魚屋のおじさんだつた人に名前と背景が付くと、きょうここにおいでの人で、本を読んできた人と読んでない人くらい大きな違いがあります。それと、集めると見えてくるもの。僕はたくさんさんの職人の話が集まつたと

むのかというところは、どれくらいお答えになりますか。

塩野 それは一〇〇パーセント考えます。お金を出して買つてくれる人のことは考えます。だけど、話を聞く人をどう選ぶかは、自分の関心のためです。最初に、たまたま西岡棟梁をやりました。その後ずつとさまざまな



きに、日本人はこんなに仕事に一生懸命で、真面目で、努力を惜しまない人たちなんだと痛感した。高校生にそれを感じてもらいたい。

ラジオや新聞で、戦争なんてやらないほうがいい、平和が大好きだといふけれども、本心で思ったことがあるかどうかはとても難しい。人の意見を聞いて、それを参考にしゃべつていただけでは。聞き書きを一人でもやれば、あのおじさんがこれを自分に話してくれたという自信につながる。その人が自分に教えてくれたという基盤があれば、他のものと比較したときに、一つだけでも自分が聞いて信じた事実を持てる。聞き書きはとってもいいものだと思つています。

横手市から来ました。小松正子と申します。小学校の教員をしています。結局、書き言葉というか、文字で残っているものが一番長く読まれたり、人を理解できる媒体なのではないかと思ひました。たくさん本を作られてきた中で、話し言葉から書き言葉にしていく過程で、何か変化だとか、特に感じられることがあれば教えてください。

塩野 この授業では、この後みんながインタビューをします。ICレコーダーに保存した音声五人のチームなので五で割つて、一人

一五分くらいの音声を、聞いたまま、音のまま、方言は方言のまま、どもつたらどもつたまま、それを打ち出します。使える原稿はそれだけです。削ることはできませんけど、足すことはできません。なので、絵描きさんや粘土細工の彫刻のようなことは、頭の中に想像があってもできません。植木屋さんには似ている。刈り取ってきれいな形にしていこうという意味では。だから、引くけど足さない。言葉は全て、話し言葉を皆さんが打ち出したまま。それは、最後までそのままなので、書き言葉にはならないです。文字にはなっていない。

文字にしてみると分かることがいっぱいあります。僕たちはね、このやりとりを、意味だけ汲み取っているんです。僕が今いろいろしゃべっています。方言もそのままだよって言ったときに、あなたたちの頭には、方言そのまま、しゃべり言葉のまま、っていう芯の部分だけ入って領いている。ところが後でテープ起こしをしてみると、ああ、うう、だとか、口癖とかいっぱいしゃべりながら自分ってやってるんだな。こんなに遠回しにしゃべって、私って本当、嫌なやつとかかって思う。これを文字に起こしてもう一度聞き直すわけです。僕がしゃべった言葉とか、きょうお話ししてくださる方の言葉を。そうするとね、言葉を打っている、手で書き写しているときに、頭の中に声が甦るんですよ。

るけれども、聞き書きってそんなに何回もできない。とても時間がかかるの。聞きに行くだけで一、二年かかる。僕は、自分の専属の文字起こししてくれる人たちが何人かいるので、その人たちにお金を払って、原稿に起こしたものをもらっている。それを整理して、この後その整理の仕方を話しますが、ものすごく時間がかかるの。それをやっている間じゅう、例えば西岡棟梁だとね、頭の中でずっと西岡棟梁がしゃべってるのよ。他の仕事をすると、西岡棟梁に戻れなくなるの。聞き書きのことだけ考えていくと、生きていけなくなる。なので途中でエッセーを書いたり、絵本のシーンをどうやったら作れるだろうかということを考えながら、日々楽しく過ごしています。

初めまして。羽川美貴子と申します。秋田市から来ました。趣味で友達と小さい本を作ったり、文章を書いたりしています。いろんな人たちが集まって話をしたのを、書き起こして掲載したことがあります。話された言葉を基本的に全部そのとおり起こして、原稿をお見せしたら、「私、こんなこと言っていない」と言われて、随分手が入りました。

塩野さんの文章では、まず質問者の質問が全部なくなっていて、その人が話したように書いてあるけれども、恐らく、そ

僕が今しゃべっているのは秋田弁のなまりがあると思いますが、語尾の部分に特徴があつて。日本人ははっきり言いたくないので、だけどね、だけどねつつつて、文章にすると、「だけどね」で終わっていて、そのままじゃ使えないなと思われる部分がある。日本人ってそういうしゃべり方をしていることに気が付く。

しゃべり言葉って相手が領いてくれるんです。僕、さつき並んでもらって顔を見せてもらいました。僕がしゃべるたびに、優しい皆さんは領いてくれる。領いてくれるかどうかとても大事で、領いてくれたら次に行ける。そこで首をかしげられると、言い足さなきやいけないというのが、言葉の中に全部出てくるんです。

僕が書いた本の中の西岡棟梁は皆さんに向かってしゃべってくれるように読める。僕が納得したので、話が次へいった。なので、読んだ人にとっても、納得がいく文章に僕が整理しているの、とても読みやすくてきている。

こんにちは。岩手県から来ました佐藤快威です。聞き書きを勉強したくて来ました。塩野さんは、普段、意識して聞き書きの勉強材料にしている、日常の出来事や趣味はありますか。

のとおり書いたわけではないと思うんです。最終的に読まれた方が、これは自分が言ったことがそのまま書かれていると感じる文章を書くには、どうしたらいいのだろうと、きょう、申し込みをしました。

塩野 誤解があるので、誤解をまず解きます。僕はしゃべったとおりに書いています。しゃべったとおりに書いてないとすれば、きょうの背広は何色ですかと僕が質問したら、青ですって答えた。「青です」だけが彼の答えだけれども、主語がないので「きょう着ている背広は」を足すことはあります。それから、「けどね」をずっと言い続けている人は、「けどね」を取って、「です」にすることはあります。言っていないことは一切、書きません。

最終的には原稿を見せて、書かれて嫌なことは、相談の上で削ります。例えば、離婚の話とか書かないでくれるかな、聞かれたからついしゃべっちゃったけど、というときには、削りましようか、でも離婚があるから今のあなたがあるよ。しゃべったほうがいいと思うな。ここで隠すと、後ではばれたとき変えよ、って言いながら説得はしますが基本的に削ります。

とても肝心なところなんです。質問を消してなぜ文章が出来上がるか。「あなたのお父さん

塩野 ありません。というかね、僕、世界中を回って、ジャングルに潜り込んだり、アデスの山を走ってみたり、いろんなことをしてきたのよ。僕の七八歳の中に、いろんなものがあるの。今も余分な話をしていまずけど、一かけら一かけらを出すことで話が進んで、皆さんが領いてくれるのを、嬉しくってやっていかもしれません。今は答えが分からなかったり、何を言っているか分からないかもしれないけど、五年ぐらいたつたときに、塩野さんあんなこと言ってたなみたいなことが、たぶんあると思うんです。

僕は二〇年ぐらい、月に一回、電話相談室のように、学校に行かない小学校一年生から高校三年生までの質問に答える役目をしているのよ。毎回いろんなことを質問してくるんだけど、すぐの正解なんてないことばかり聞くの。だけど、答えてくれる大人がいるということ、答えに直結はしないけれども、それなりに含みのある言葉と自分の体験を交えて話すことで、面白いと思ってくれるだろう。いつか役に立つかもしれない。本もそうですけど、読んだそのときは、ああ、面白かったらぐらいたと思う。二〇年も三〇年もたつてから、何かの決心のときや、どこかに旅行して川の流れを嗅いだときに、僕の言葉の一つを思い出すかもしれない。そういうものだろうと思う。

聞き書きは自分の仕事のひとつだと思っの仕事はなんですか「一つは僕は聞き書きです。答えは、「うちのおやじの仕事は木工です」って返事します。ということは、答えの中に僕の質問が全て含まれてるんです。なので、質問を捨てても済むんですよ。

さつきの方が下調べをするかどうかとおっしゃいました。きょうここに話に来てくれる方は、皆さん、どなたが来てくれるか知ってるんですよ。僕はこの主催者に、言うなつて言つたんです。なぜなら、言うとなんたは必ずネットで調べるだろう。いい質問を考えようと思う。それから、上手に今回のワークを終わらせたいと働く。だけど、調べた言葉は一切、聞き書きでは使えないの。相手が答えてくれない限り、僕たちはどんなに調べていっても、自分の知識が増えただけで、本人がそうなるかどうか分からないわけ。

例えば、炭焼きさんにきょう会いに行くというので、炭の焼き方を、白炭と黒炭があるとか、どんな木だとどんな炭ができるとか調べても、それを相手が言葉にしてくれない限り、例えばこつちが、炭には白炭と黒炭がありますね。白炭ってカンカンってなるやつですよね。白炭って言つたら答えは「はい」。「はい」しか使えない。言つた僕の質問は捨てられちゃうわけ。なので聞き書きは、文章にして答えてくださるような質問をつくるしかないの。例えばどういうことでしょうかとか、そ

れを作るための工程を説明してただけです。かとか、文章で返ってくる質問をつくるのが、とても大事です。これは次の授業の話ですが、頭の隅っこに入れてください。

坂本佐穂と申します。仙北市角館から参りました。文章について、ずっと独学でやってきたことを続けてきましたので、一度、先生のお話をしっかり伺いたいと思います。私の娘が中学生時代に先生のご指導で聞き書きを体験しておりまして、そのときの話も聞いて、自分が受講したいと思い、きょう参りました。よろしくお願いします。

二カ月に一度フリーマガジンを発行しておりまして、地域の方にインタビュに伺います。どうしても興味の持てない分野の方に話を聞かなければいけない場合がまれにあります。準備はしていくのですが、薄っぺらい文章になってしまうのではないかと不安があります。そういったことが塩野先生にはおありなのか。ある場合、どのように対処したらいいのか伺いたいです。

塩野 まず最初に。答えはありません。薄っぺらになるかならないかは、皆さんが締め切りだとか、頼まれてやっている仕事だからというのがあると思うのですが、基本的には、

きの基本です。僕が高校生たちに尊敬して聞くんだけだと言って言うけれど、尊敬して、どうやってやれば分かんないって言うので、領けばいいの。大きく領くの。おかしかったら笑うの。この反応が、あなたに対して私は無関心じゃない。次の質問が、あなたをもっと知りたいという意味だと、伝えていくことになりません。

この講座では、聞き書きの全工程をやりまします。インタビュをして答えてもらいます。その声は皆さんのレコーダーに入っています。レコーダーの中の声を文字起こしします。今はAIで起こすこともできますが、僕をサポートしているプロたちはAIを基本的には使いません。なぜならAIは間違いが多い。その間違いの部分の調べるために聞き直すのなら、人が起こしたほうが早い。きょうは一五分くらいずつ文字に起こしたものを五人分足すと、一本のインタビュが出来上がる。それは第一原稿といって、質問、答え、質問、答えという原稿です。この原稿は死ぬまで保存しておきます。文句を言われたときに答えられるようにこの原稿には手を付けません。

その次の作業は、質問を消すことです。第一原稿は保存したまま、それを別の画面で呼び出して、新しく名前を付けて保存をして、第二原稿という名前を付けます。第二原稿の画面を浮かべたところで、質問を消し

きょうの午後に皆さんが話し手の方に質問をするを含めて、真剣勝負なんです。紙に書いた質問を読み上げて答えてもらうわけじゃないので、その人の一挙一動、言葉、しぐさ、全て反応の一つなので、それを見逃さないようにして。返ってくる返事に、もつと知りたいたい、もうちょっとそこを知りたいと。

例えば、木は何で切りますか。ノコギリだよ。ああ、ノコギリで切るので終わると薄っぺらな、木はノコギリで切りますという概念が入っただけです。ところが、そのノコギリはどんなものですか。どんなノコギリならあなた知ってるの。私を知っているのは、四角くて両側にぎざぎざが付いていますと答えたとき、そのぎざぎざは、両方とも同じぎざぎざかどうか知っているかと聞かれて、知りません。同じじゃないんですか。片方は目が粗くて、片方は目が細いんだよ。なんで細いんですか。細いやつは、木を横に切るときに使うんだよ。粗いほうは、縦に切るときに使うんだよ。縦に切るときは、繊維が挟まって切りづらいからぎざぎざが大きいんだよ。縦挽きと横挽きがあつて、こうやるんだよ。だから私のような家具を作る職人は、目の細かいノコギリを使うんだという説明までくると、絵が浮かぶ。知らなかったノコギリの知識が手に入る。自分も喜んで聞くし、読者にもそれを伝えられるように聞く。

興味がないのに聞いている原稿は、絶対にいきません。主語を補ったり、ああ、ううの口癖や、「とか」つていうのを取ったりします。その作業をするための原稿が第二原稿です。出来上がった第二原稿はそのまま保存します。パソコンの中には、第一原稿、第二原稿があります。

ここから今度はさまざまなかをやつていかなきゃいけない。そのためには第二原稿を呼び出して、新しく第三原稿という名前を付けて、原稿をいじります。常に、やった工程の原稿はパソコンの中に保存されます。いつでも元へ戻つて聞き直すことができます。します。こういう作業を繰り返していきま

今回は一時間一五分のインタビュなのであまり難しいことはないのですが、皆さんはいざ、聞き書きの本を一冊作るとか、最後に自分の作品を作り上げるのが前提で、今、僕の授業を受けています。僕が一年や二年をかけて聞いたように、皆さんが隣のおじいちゃんなんかにつつと聞いていくと、膨大な量のインタビュがたまりまします。通常、一時間しやべると原稿用紙で六〇枚ぐらいになります。だから三時間聞くと一八〇枚。それだけ文字を起こすのは大変な作業です。本を作つたり、一個の作品を作り上げるには、第三原稿以降の作業が必要になります。出来上がったら、話し手に返して読んでいただきま



面白くない。それは、編集長が使わないと言うべき。読者には全て伝わりまします。僕たちの文章つて、本当に自分の素が現れる。聞き書きで作る場合も、僕の言葉じゃないけれど、僕はその言葉に感動して選んでいるので僕が感動したことが伝わりまします。その人に向かつて、そうですね、それは初めて聞きました、というようなこと。そのやりとりが、聞き書

とにかく音でしよう。岩手の人が「盛岡」と言つた。ここにある音は「もりおか」。パソコンは利口だから、「もりおか」つて入ると「盛岡」にしてくれましますし、僕らの頭もそうなつていいる。だけと本当は、「もり」が「森」だつてあり得るわけです。なので、地名や固有名詞、専門用語や道具の名前は、全て話し手に確認しない限り、間違いがいっぱいある。そういう作業を経て、最終的には互いの了解を得て、作品が出来上がる工程をやつていきます。

大仙市から参りました谷口藤美と申します。市役所の職員を退職しまして、今、再任用で働いております。過去に、行政広報を五年間担当しました。そのときに、「明治の男女」ということで、一〇〇歳のおばあちゃんから始まつて、九八歳、九七歳と一五人の方をインタビュした経験があります。テープも全て取っておりますけれど、必死になってメモを取りました。先生はインタビュの際にはメモを取ることはありませんか。

塩野 ありません。全く取らないわけじゃない。どうしたい。つて言われたけど、どの字か思い浮かばないので「どうたい」つて何か後で聞こうとメモは取りまします。返ってきた答えにすぐ質問したいときにはメモを取る場

合がありますが、話の中身のメモは取りません。なぜなら、目線がずれるからです。それから、メモを取ると、何のメモを取ったか向こうのぞいてるんです。向こうの人は、そういうことを聞きたいんだって付度してくるんです。そういうことがないように、基本的に、全部ICレコーダーです。

潟上市から来ました中川兼博といいます。現役を引退しまして自宅の農業経営をやっています。一二年前に、秋田市内で先生と竹内洋岳さんのトークショーがありました。そのときに先生の書かれた本を購入しました。読んだのですが、これは聞き書きではないと思いました。今回再度読んだのですが、やっぱり単なる聞き書きではないと強く思いました。聞き書き以上の何かというふうに、自分としては感じました。内容が、単に聞いて書いた内容では把握できないような、そういう文章がありました。竹内さんというのは、生きるか死ぬかの瀬戸際で、登頂しているのを感じまして。聞き書きを超えた何かと感じる秘密みたいなのは何かをお聞きしたいと思いました。本のタイトルは『登頂』です。

塩野 お答えします。それは聞き書きです。一〇〇パーセント、彼がしゃべった言葉だけプロだからです。何を用意していても、真剣勝負で、相手の返事に自分が対応していくので。僕が利口だからとか慣れているからではなくて、誰でもそうなんです。次の授業で質問のつくり方の話はします。初めての人たちは、何の質問を聞いていけばいいかということを言います。

大事なことは、全て一人称で書かれています。私とか、俺とか、わしと書かれています。「わし」は尋常小学校で終わりにやっつて言うのと、その後すぐ弟子入りしたのかなくて。でもこの言葉だけでは「わし」って誰なのか分かりませんよね。本というのは、「わし」が誰なのか分からないまま読んでいくと、意味が分からなくなつて途中でやめたくなる。なので、まず「わし」が誰なのかを分かるように質問をします。名前、何年何月、生まれた場所、お父さんは大工で、私も大工ですというのがあると、何歳のおじいちゃん、大工さんでつてということが分かつて、「わし」の背景ができる。というようなことも、質問しないといけないので、質問表の中に入ってきます。

大石花と申します。私も角館から来ました。今は国際教養大学の学生です。たくさんお話を伺いたい人が頭に浮かびますが、今、緊張していて。例えば職人や立派な方々とか、お話を伺うときに自

で作った、僕の聞き書きの典型です。中身が深く思えるのは、彼が深いことをしゃべったからです。それを聞き出すのに、僕がさまざまな質問をしたかもしれないが、そこには現れてないので。これはね、その前に、『初代竹内洋岳に聞く』という本があつて、そこに一四座のうちの一座まで登つたことが書いてあるんです。そのときの約束で、全部登つたら僕はやらないと。一座までは僕がやります。残り三つは自分で原稿書くんだよと引き受けなかつてもりやつたんです。

ところが彼は自分で書かないというので、もう一回インタビューをして。僕、最後なんかは、自分もネパールまで行つて彼が帰つてくるのを待つてやつて。その原稿は本当の聞き書きです。この後皆さんも、午後のインタビューをして、明日原稿をまとめると、同じ結果が出ますから。それぐらい真剣に互いがしゃべると、大事なことを聞き逃さないように言葉にしてもらおうと質問を繰り返すと、そういうふうになります。皆さんもなります。

竹内君たちはチームを組んでいます。チームのメンバー三人で登つていき、そのうちの一人の足が凍傷になつて登れなければ置いていきます。登頂を諦めて、その人を連れてベースキャンプに帰るといふことは最後までやしません。全部、個人の作業、個人の意志でやります。仲良しの友達でチームを組ん

分が緊張することもあつて、相手が緊張されていることもあると思います。お話を聞くとその関係性のつくり方で気を付けていることはありますか。あとは、時間を割いていただいでお話を聞かせてもらうというときに、どういう恩返しができるんだらうかとか、搾取しないというか、どうやったらお互いが納得している気持ちでお話が聞けるかを、どう考えていらつしやいますか。

塩野 明日の授業が終わると今の答えがありますが。誰のために作つてるかという話、話し手のために半分以上作つています。彼のことをみんなに知つてもらいたい。その人が、あなたにしゃべると、あなたを飛ばして皆さんにしゃべつたような原稿が出来上がるので、その人にとつては嬉しいことだし、その意識がなければお話を聞かせてくれないと思うので、その心配はしなくていい。やれることは、その人のためにできるだけ、誇りに思つて、私が説明しました。この人を紹介するのは私です、という気持ちが出さえすれば、あまり心配はいりません。そこまで心配していると始まらないよ。

写真：星野慧

でいるわけじゃないので、遅れたり途中で嫌になつた人は置いていきます。なぜなら他の人が登れないからです。だから竹内君は常に言うのですが、お友達とは山は登れない。助け合つては登れない。登るといふ意志を最優先する。それから死なないで帰ることが最優先。これ以上、無理にいつてつぺんまで連れて行つたら帰れなくなつてしまふかもしれない。なので、死ぬ前に、ここで君は帰つたほうがいいと言う。

きょうやつている授業も、真剣勝負です。ただ、今回は一時間なので、一時間で全てが分かるとは思いませんが、その模倣練習だと思つて残りの授業に臨んでください。

北秋田市から来ました村上京子と申します。よろしくお願ひします。先生のお話を伺つていて、聞く前に質問はあらかじめ用意しないとおつしやつていたと理解したんですけれども。例えば私なんかだと真つさらの状態で取材に行くのは怖くてできない感じですが、話を聞くときに、どういう準備をされていくのか教えていただけますか。

塩野 この授業も、高校生も中学生も、質問を用意します。だから、午後は質問づくりです。授業のメインは、質問を用意して、インタビューします。僕が質問を用意しないのは

### 塩野米松さんに学ぶ「聞き書き術」

日時：2025年7月20日(日)10:15-16:00、  
7月21日(月・祝)10:00-18:00

会場：秋田市文化創造館2階 スタジオA1  
主催：秋田市文化創造館  
後援：秋田県、秋田市、秋田県教育委員会、  
秋田市教育委員会

すべての文章の基本である「聞き書き」。文化創造館では作家の塩野米松氏を講師としてお招きし、「聞き書き」の基本的な心得や技術を学ぶ機会を設けました。塩野氏による授業をはじめ、インタビューや文字起こし、原稿執筆までの実習を通じ、「聞き書き」について学びを深める2日間でした。

●塩野米松さんのインタビューはこちら  
「あこがれのひと6」  
前篇・後篇  
[https://akitacc.jp/article/akogare-006-yonematsu\\_1/](https://akitacc.jp/article/akogare-006-yonematsu_1/)



# 六名の「話し手」について 塩野米松さんに学ぶ「聞き書き術」より

「聞き書き」実習のため、六名の「話し手」が途中から授業に加わり、六チームそれぞれ一時間一五分のインタビューの機会を得ました。塩野氏に教わった質問の立て方を念頭に置き、チーム内で質問を机上に出し合い、整理して、インタビューに臨みました。「協力いただきました方々をご紹介します。」

## 加藤誠士さん（新政酒造株式会社原料部部長）

新卒で新政酒造に入社し、七年目になるという加藤誠士さん。秋田市河辺の鶴養地域にて地元の農家さんと一体となり風土を生かした酒米栽培に取り組んでいます。米づくりに興味を持ち秋田の酒蔵で働くことになったきっかけや、酒米を通じた地域との関わり、酒米の季節の工程、自身の日本酒に対する思いなどが話題となりました。

## 加藤直哉さん（ISUKA／雲の巻）

椅子の張り替え職人として「ISUKA」の屋号で活動する加藤直哉さん。職人としての仕事の傍らカフェを経営し人々が出会い繋がる「場づくり」も担っています。全国各地

で修行を重ねた自身の来歴や、双方の事業を通じて叶えたい社会のありかた、若い世代に向けて伝えたいことなどを柔らかい雰囲気の中でお話いただきました。

## 高橋香澄さん（金工師・秋田銀線細工職人）

高校生の頃から金属工芸を学び、職人への道のりを歩んできた高橋香澄さん。仲間とともに秋田市にある「矢留彫金工房」を立ち上げ、秋田の伝統的工芸品である秋田銀線細工の制作をしています。自身による作品の他に銀線を実際にお持ちいただき、繊細な作業工程や商品開発の秘話などについて貴重なお話を聞かせていただきました。

## 東穂高さん（硝子造形家）

秋田公立美術工芸短期大学を卒業後、富山をはじめ、北陸各地のガラス工房で修行を重ねた東穂高さん。現在は秋田市新屋ガラス工房に勤務しています。「聞き手」となった受講者に自身の作品である香水瓶を手渡しながら、制作の流れや、素材としてのガラスの機能、ガラスの扱い方について丁寧に説明してくださいました。

## 斉藤健さん（弦楽器職人）

秋田市に生まれ育ち、スーパーマーケットや印刷会社に勤務したのち、三〇代後半から独学でギターを作り始めた「KEN弦楽器工

房」の斉藤健さん。材料調達之苦労話や試行錯誤を繰り返す制作工程についてお話しいただきました。精巧なづくりの一五八〇年頃の起源とするバロックギターがケースから取り出されると、歓声があがりました。

## 藤浩志さん（美術家）

文化創造館の元館長、藤浩志さん。廃材や捨てられたおもちゃを用いた作品制作や、数々のアートプロジェクトを展開しています。塩野さんの本の熱心な読者でもありました。九州で過ごした幼少期から現在の秋田に至るまで、海外や日本各地での豊富な経験を踏まえた、藤さんにとつての「美術」をたっぷり語っていただきました。

今回、話し手の皆様はそれぞれの作品に込めて制作に使う材料、道具などをお持ちくださいました。実際にそれらを見せていただきながらお話をうかがうと、次第に緊張もほぐれ、とても和気藹々とした空気のなかで会話が弾んだように思えます。実際に見て、触れることのできるものがあると話し手と聞き手、双方の距離も縮まり話もより膨らんでいくようでした。

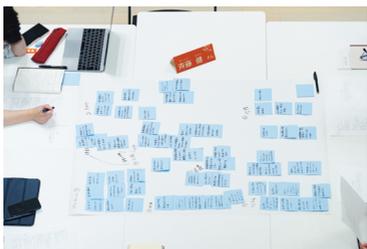
インタビューを終え、参加者は一人あたり約一五分の文字起こしを担当しました。話し

手の語り口調や口癖までをそっくりそのまま文字起こしした原稿を「第一原稿」として二日目の朝に持参し、塩野さんの授業の続きを待ちました。

文：小野地瞳 写真：星野慧



前列左より藤浩志氏、斉藤健氏、東穂高氏、塩野米松氏、加藤誠士氏、高橋香澄氏、加藤直哉氏



母は私を「ジェンダーさん」と呼ぶことがある。フリーの記者をしている私がジェンダー（性）の記事を書いているからだ。母は冗談で呼ぶけれど、私がジェンダーに目を向けたきっかけは母だった。

母は自営の仕事や家事、育児、義父母の世話をほぼ一人で担ってきた。父は今に至るまで母に任せきりだが、私は父をなぜか憎めない。その一方、母が縛りから解放されるよう願ってきた。

私が幼い頃、母は私と妹を連れて何度も家出しようとした。だが車に乗り込んだ途端じつと考えて、洗濯物を干したままだからやめよう、など些細な理由を挙げて家出を中止した。私は不思議だった。私と妹は、つらいなら出て行こうよと母に言った。しかし母はそうしなかった。母は家のことを一人で担っていたが、家計を握っているわけではなかった。家に縛られ苦しんでいたが、母にとって家は拠り所でもあった。私たちが巣立った後も母は父と家にいる。母自身の手術の前日も「私の代わりはいない」という雰囲気、休みなく家事をしている。

母の幸せは母が決めることだ。ただ、母を縛ってきた「性のあり方」に、私は無関心でいられない。時代は変わったはずなのに私もまた性のあり方に縛られ、母とは違う形で性差別に苦しんでいるからだ。

フリーの記者になる前、私は地元紙で記者をしていた。さまざまな取材をする中で最も関心を引かれたテーマは性だった。そして性は、最も記事にしにくいテーマでもあった。

この社会は、あらゆる場面で人を「男」「女」と乱暴に分ける。けれど性は、単純に二分できない。性は、人の数だけある。「性の語り」も人の数だけある。

様々な人の「性の語り」に耳を傾けると、なぜか共通の苦しみを経験していたり、同じ性であっても異なる経験をしていたりする。私たちは同じ空の下で暮らしている。誰かに不正を背負わせている。性の語りは、社会の不正や構造の問題を浮き彫りにする。だから私は性の語りを聞きたいと願う。

フリーになり、自分の記事を書せるウェブサイトを作った。自作自演なので誰にも縛られない。母からジェンダーさんと呼ばれるほどには、性の記事を書けるようになった。それでも私はいまだに「縛られている」と感じることもある。これまで受け取った「歯止め」の言葉を思い出し、一瞬ひるんでしまう。

私が出合った歯止めの言葉を少し書き出してみたい。「何でも差別と言うのはおかしい」「そんなのはよくあること」「見方が偏っている」「お前は秋田美人に恨みでもあるのか！（※秋田美人の「観光活用」を批判した記事に）」――。なぜ性は、これほど人の心をざわつかせ、反発を生むのだろうか？ もしかすると性を語ることは、誰かにとつての「普通」や「日常」をおびやかすことなのかもしれない。

母を縛り、私を縛る性。私から見たら「縛る側」だった父も、性に、家に、縛られてきたのではと今は思う。「普通」や「日常」はこうして縛ったり縛られたりしながら、時には誰かを傷つけ切り捨てられる暴力性によって、かろうじてまとまってきたのではないか。その縛りをほどきたくて、性の取材をしている。



多くの人が「人間は他の生き物より優先的に生きる権利がある」と考えているようである。少なくとも私の目にはそう映る。私も生存本能があるので、できれば生き続けたいと思ってる。それがつらくない生活であればなおありがたい。だが、いち生物として生きながらえたいと思う一方で、我々ヒト科ヒト属のホモ・サピエンスが他の生き物より優先的に生きる権利があるとは考えていない。

自分の力だけで山に登ってみたいと考えて、装備をできるだけ少なくし、食料と燃料を山中で自給する山登り（サバイバル登山）を続けてきた。

自力の割合が多いほど、山旅は手応えを増し、「面白い。そんなサバイバル登山を通して、イワナを釣り上げて食べ、「食料とは命だ」と身体を通して経験した。その後、狩猟を始めたのは、魚（イワナ）だけではなく、肉を食べるときにも命を感じたいと思ったからである。

サバイバル登山中のフィールドは人工施設がない山奥なので面白い・金のいらぬ生活である。そして百之助はそのための機能を備えていた。一〇〇年以上前の車道がなかった頃に、斧を持って山道を登ってきた木こりが周辺の樹を切り倒し、大工道具を持って登ってきた大工が製材して組み上げ、小舞竹を編んで、粘土を塗った家である。明治時代には水道もガスも電気もなかったで、それらなしで生活できるようになっている。湧き水を引いて水舟で受け、柴や薪を燃料に土間のカマドで火を熾す。現代的な利便性を求めて、それらをリフォームしてしまうと「自力・面白い・金のいらぬ」機能を失ってしまう。というわけで、水と燃料を野山から調達してくる生活を開始した。ちょっとした電気はソーラー発電で賄っている。

問題になるのは食料である。関東近郊の山間部では、おいしい山野草はことごとく鹿に食べられていて、ほぼ生えていない。だから、鹿柵がなんとか残っている畑で農作業を始めた。肉類が完全自給できるのは猟期間の四ヶ月プラス干し肉がある二ヶ月というところである。穀類は、ソバ、イモ、小麦はめどが立ったものの、稲作はこれからだ。

作物を育てるために肥料や農薬を買ってきたら「自力・面白い・金のいらぬ」生活ではない。食料品店で野菜を買ってことに比べたら、畑作には「自力」部分が多いものの、なかを買わなくてはできないなら、根源的な部分で経済活動のおかげで成り立つ「他力（もしくは化石燃料の力）」である。な

お金をまったく使わない。そんな長期のサバイバル登山を繰り返すうちに、本来お金は、生きるのに直接必要なものではない、ということも体験した。

自力の登山は面白く、お金もいらぬ。もし普段の生活でも同じことができるなら、いわゆる賃金労働をして自分の人生を切り売りする必要もなくなる。折良く幸運な縁があり、私は関東近郊の廃村に残る小さな民家と周辺の土地を格安で譲ってもらうことができた。そして現在は一年の半分以上を廃山村に籠もって、サバイバル的山暮らしを楽しんでいる。

目指すは「自力・面白い・金のいらぬ」生活である。正直に告白するなら、最初はそこまで考えていなかった。いわゆる田舎暮らし（場所が田舎の都市型生活）をイメージしていた。だが譲り受けはやほやの頃、廃屋と化した百之助（その家の屋号）の縁側に寝転んで、釘を使わずに組み上げられた日本の伝統的構造家屋の天井を眺めていて、気がついた。自分がしたいのは、いわゆる田舎でおこなう都市型生活ではない。「自力・も購入せず、土と雨と太陽と、枯れ草の力を借り、自家採種した種を毎年蒔くのが自立して循環する自給自足の農作である。

さてタイトルにあるように本稿は、個人と世界の境界線が曖昧なことを説明しようとしているが、そこに至るにはもう一つの要素が必要になる。最近、流行の「腸活」だ。私は健康オタクの傾向があり、身体や進化や生命現象について学ぶのを趣味としている。私の見解を述べるスペースはここにはないが、ペニシリンの発見以降、様々な抗生物質が普及し、腸内の生体バランスに影響を与えている。また、腸内細菌叢の多様性と、適切な免疫の働きの関係が、現在では知られている（だから腸活が注目されている）。私の狩猟の主な獲物は鹿だが、鹿は草食なのにすばらしい筋肉を備えている。四部屋に分かれた巨大な胃袋に草を溜め込んで、草を栄養とするバクテリアを繁殖させて、生成されるアミノ酸やバクテリアそのものを消化吸収することで、タンパク質を得ているからだ。鹿の筋肉の秘密は彼らの消化器官の細菌叢にある。

野菜も土壌微生物が活発に働ける環境を作ってやれば、人為的に栄養（肥料）を補給しなくても、充分に育つことが研究されている。現代の日本で、化成肥料と農薬を使う慣行農業が全盛なのは、アグリビジネスの構造と相性がよく、そっちの方が経済効果が高いからである。

健康のためには腸内細菌叢のバランスが重要で、腸内のバク

テリアのためには彼らの食べ物であり住処である繊維質が必要である。だから私は食べ物の七割を野菜や精製していない穀類にするように心がけている。そして実際に体調はよい。風邪もほとんど引かない。

裏山から引いた水を飲み、裏山で拾った薪を燃料とし、廃村の菜園から収穫した野菜を食べる。私と世界には皮膚という境界線がある。私の意識は皮膚の内側から出たことがない。それでは山から湧き出た水を飲んだとき、その水は私なのだろうか、それとも外界なのだろうか。山で拾った薪を燃焼させて調理した野菜や穀類、近所で撃ち止めた鹿を食べたとき、胃袋に入って、消化され私になった分子たちは外界なのだろうか。野菜は雨と太陽と土壌から育っている。土壌微生物のバランスがよければ、害虫や病気にも負けずに健全に育つ。それを私は美味しく食べる。自分が食べるものが健全であってほしいので、土壌を汚す農薬はもちろん、細菌叢を乱す化成肥料をつかうことはない。私は野菜を通して、雨と太陽と大地を食べている。周辺の山と土地と私自身は繋がっている。この世界を織りなすすべてのものがないと私は生きていくことができない。世界が健全でなければ、私も健康にはなり得ない。

これらはすべて都市型の生活をしていた頃には持ち得なかった感覚である。どこか遠くから供給される水道水と都市ガスと、どこか遠くから運び込まれる食料を購入しているときに

## 秋田のクマの出没傾向と対策

近藤麻実

市街地や住宅地など里山を越えて頻繁にクマが出没する現状を受け、当館にて開催されたトークイベント「クマと人の共生を学ぶ」より、秋田県自然保護課でクマ対策の専門職員として日々奮闘する近藤氏の基調講演。

2010年以降増え続ける生活圏での出没  
私は、秋田県自然保護課でクマをはじめとした野生鳥獣の対策を担当しています。これは日本全国のクマの人身事故の状況を表した図になります(図1)。色が赤に近ければ近いほど事故が多いことを示しています。秋田と岩手が双璧を成しています。ただ、事故が多いただけではなくて、起きている場所も非常に問題が大きいと考えています。

これは5年刻みで人身事故の件数を積み上げたものになります(図2)。昔も今も山の中の事故——緑色です——は起きているのですが、2010年頃から件数が全体的に増えてきています。しかも事故の起きている場所が人の生活圏、私たちの日常生活の中で事故が増えているというのが2010年以降の傾向です。

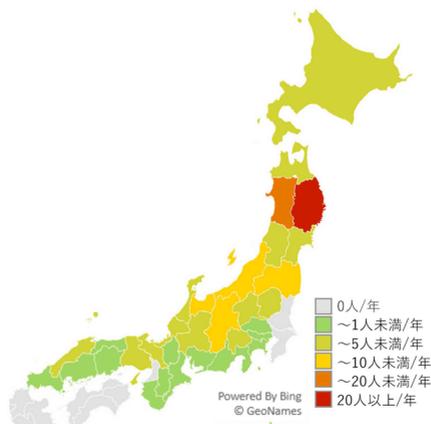


図1 クマによる人身事故の発生状況(2015-2024年の平均被害者数) 環境省統計より秋田県自然保護課作成

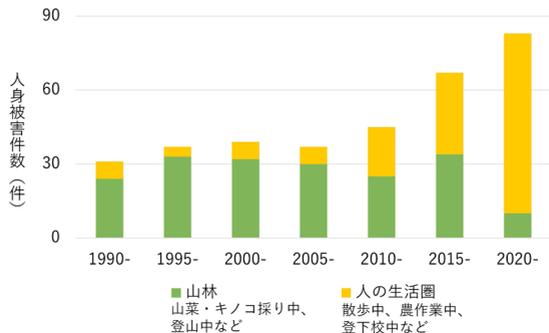


図2 秋田県におけるクマによる人身事故発生件数の推移

は、大地と共に生きている感覚は得られなかった。もつというなら、人間だけで生きていけると思えてしまった。鹿とも大地を通して繋がっている。クマは我が家の果実やニホンミツバチを食べべてしまう競合相手である。だが私も六年間の廃村生活で二頭獲って食べた。もしかしてときに食べられて融合していくことも、生きることには含まれているのかもしれない。

**緊急開催トークイベント「クマと人の共生を学ぶ」**

日時：2025年12月15日(月) 13:00-17:10  
会場：秋田市文化創造館 2階 スタジオA1  
主催：秋田市文化創造館  
後援：秋田県、秋田魁新報社

第①部 基調講演 13:00-14:30  
近藤麻実(秋田県自然保護課)  
田口洋美(一般社団法人狩猟文化研究所)  
——秋田のクマの出没傾向とその対策  
いまクマが生息域を拡大する事情について。

第②部 トークセッション 14:40-16:10  
石川直樹(写真家)  
角幡唯介(探検家・作家)  
服部文祥(登山家・作家)  
——極地への旅や生きるための狩猟という  
実践を通じた、動物と人の生死をめぐる考察。

第③部 ディスカッション 16:20-17:10  
——質疑(客席含む)を契機にした登壇者全員  
による意見交換。

市街地など生活圏でも頻繁にクマが出没する深刻な状況を受け、秋田のクマの生態、狩猟文化、野生動物と人の共生とは何か、事例を挙げながら多角的に話し合いました。イベント当日は200名もの来場者で賑わい、関連書籍の販売も行いました。

## 2025年の特徴

2025年は出沒がとても多かったです。ただ多いだけではなくて、これまであまりないこと——鶏小屋を破って鶏を食べたり、納屋の壁を壊して中に入り米糠を食べたり——が起きました。クマの秋の重要な食物である堅果類の凶作は予測されていたので、秋に大量出沒が起きることは予測していましたが、秋の大量出沒以前から、通常とは違うクマの振る舞いが報告されていきましたので、県としては7月の段階で最高レベルの注意を発信していました。2025年は、それまでの過去最大の出沒となった2023年を大幅に上回る出沒件数となりました。

## 栗、柿、ギンナンの樹木の管理

さらに一昨年と比べるとクマが大胆になってきたと感じています。市街地に出てきていても焦らない。慌てて逃げもせず、ぼやっとしている。人が見えていても寝はじめくらい緊張感のない状況が生まれています。食べるメニューも広がっています。今年にはギンナンが食べられ始めました。おそらく、柿についたクマが人の生活圏に長く滞在することで、ギンナンにも触れる機会が増え、その結果、一部のクマがギンナンを食べることを覚え始めたのだと考えています。クマにとってはギンナンよりも栗や柿のほうが嗜好性が高い食べ物です。でも、イチヨウの木は

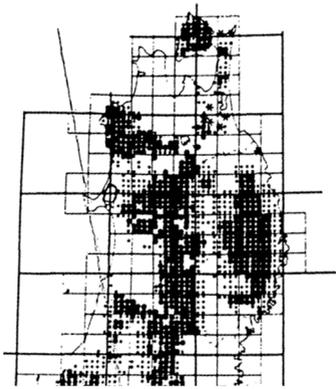


図3 1970年代のツキノワグマの分布  
「第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書（哺乳類）全国版」（環境庁, 1979）より

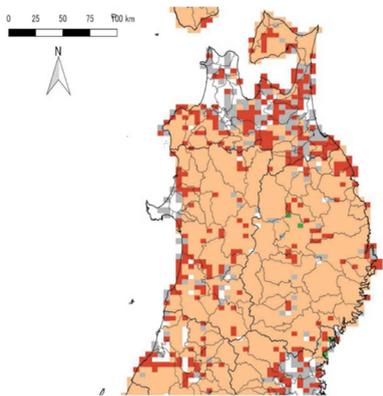


図4 2010年代のツキノワグマの分布  
「平成30年度（2018年度）中大型哺乳類分布調査 調査報告書 クマ類（ヒグマ・ツキノワグマ）・カモシカ」（環境相自然環境局生物多様性センター, 2019）より

そこらじゅうの街路、公園にありますね。秋田に暮らすクマが普通にギンナンを食べるようになってしまえば、出沒は今後もっと深刻になっていきますので、それを食い止めなくてはなりません。たぶん、まだ間に合う。恐らく2026年は出沒が落ち着くと思えますが、今のうちに、まずは栗や柿に依存するクマを集落に滞在させない対策を進めていく必要があります。

## 出沒が増えている理由

一昨年と今年と超大量出沒が起きたわけですが、そもそもなぜ出沒が増えているのか。  
①最終的な引き金は山の食べ物の豊作、凶作の波。しかし大凶作はこれまでもあったはず。なのに、なぜ最近になって、こんなに増えてきたのかという点、  
②クマの生息分布が広がっていることに尽きるところだと思います。分布が広がれば当然、数も増えます。これは1979年の国の調査です（図3）。色が付いている所にクマがいるという図になります。

最近の環境省の調査ではこの図（図4）。秋田県はほぼ全域にわたり塗られています。クマがどこにでもいるような状況に、この何十年かで変わってきています。

山の木を切り過ぎたとか、開発で山を追わ

れたと指摘する声もありますけれど、この30年間、県内の森林面積は変わっていません。針葉樹も広葉樹もほぼ横ばいです。面積は変わってないのですが、木の蓄積量、要するに木が大きく太くなっています。30年前は森を見ても木が小さく見通しも利いていた。それが今はもこもこの緑。川沿いにもしつかり緑が生い茂り、クマにとっては身を隠して移動できるような場所が家のすぐそこまで充実している状況にあります。

川沿いの緑の繁茂の中に親子のクマがいて、釣りに行こうとした方が川に下りていく途中に遭って事故が起こっています。この場所の場合、かつてはクマの親子が河川敷でんびりすることなどできなかったろうと思います。丸見えですからね。しかし事故当時、現場を確認したところ、この緑の中に木苺を食べた跡やうんこ、寝た跡もありました。

③農地や農業の変化というのがあります。農業の技術が発達するのはいいことなのですが、機械化されれば農地に人の姿が減ります。野外であまり人の気配がない時代だと思えます。転作も奨励され、稲からそば、飼料米と単価が安いものに変わってきています。高齢化で草刈りの人手が減り、耕作放棄、不在地主が増え、クマにとっては過ごしやすい場所が増えていく。

栗の木のある畑でおばあさんがクマに襲われて怪我をしています。栗の木は、そのおば

あさんの持ち物ではないんですよ。持ち主はどうしているかというと、その村にはいません。手入れをする人がいないんです。

## クマと人が近い時代

クマの生息分布が広がり、クマと人の距離が近い時代になっています。今ここで生きて暮らしている私たちは初めての状況に直面しています。日本中そうです。これだけ近い距離で生きている時代を誰も知らない。初めて経験しているの、どうしたらいいか、まだまだ分からないことがたくさんあります。

## 捕獲

こういう話をするとよくいわれます。捕獲すればいいじゃん、駆除すればいいじゃん。駆除もしています。ここ数年、捕獲数が伸びており、500〜600頭ぐらゐ、コンスタントに捕獲をしています。一昨年にものごく捕獲数が増え2300頭。2025年度についても同じくらい既に捕獲が進んでいます。「畏をもっと置け」ともいわれますが、畏を置いて、入るか入らないかはクマ次第です。

## 秋田県の対策

秋田県ではどういった対策をしているのか、紹介したいと思います。出沒と事故を防ぐために日々尽力しています。

① 出没と事故を誘引している柿や栗の木の伐採への補助をしています。敷地にあるご自身の財産ですから、各自でやっていただきたいのですが、どうしても手が回らない、費用が高い場合もありますので、市町村を通じて取りまとめをいただいています。

② 緩衝帯整備事業をしています。木を伐採し、見通しをよくすると、クマが出没しても見えますので、鉢合わせを避けることができます。

③ 山の中の針広混交林化事業をしています。ナラ枯れ対策事業など、山の整備をしています。

④ 電気柵の設置をしています。農地を電気柵でクマから守り、また電気柵設置の研修や、限りはありますが、貸し出しもしています。

⑤ 情報・知識の普及啓発活動をしています。クマの生態、日常生活における注意点、事故防止策を広報しています。

⑥ クマがどこをどんなふうに通る市街地に入ってきているのかを調査しています。そのルートをどう止めていくかを研究している最中です。これらの対策をしてもなお、出てきてしまうことがあるので、そうした場合に備えて、

⑦ 出没した場合を想定した訓練をしています。市町村の職員・警察、地元ハンターたちと一緒に訓練を重ねています。

⑧ 実際に出没した場合の対応もしています。

出没対応を行うのは市町村ですので、県はそのサポートをしています。応援要請があれば

一緒に現場に行き、追い払いをしたり、時には捕獲までやっています。麻酔銃や吹き矢を持って現場に行くこともあります。

⑨ 出没や事故が起きた後については、出没地点、事故現場の調査をしています。小屋が壊されるようなことがあれば、現場でクマの毛を採取し、その後捕獲されたクマと照合をします。行動がエスカレートしないように、不幸な事故が起きないように監視し対策を練っています。

⑩ このほか、県は狩猟免許試験を行っています。免許試験の回数を増やし、免許や銃を新規取得する方への補助や、狩猟期間の延長などの対策を実施しています。

それと、捕獲は試みたけれど、逃げられてしまった場合は、また来ないように市役所の方と一緒に木の実を拾ったこともありました。本当はその土地を持つている方にやってほしいことではありますが、なかなかやらないうちに次のクマが来てしまうと困るので、応急的に市役所の方とくみあいをしました。その後、その場所にはクマは来ていません。

#### 防災のキーワード

防災の分野では、3つのキーワード「自助」「共助」「公助」というものがあります。この考え方をクマにも持ち込んでいただけないか

## 「狩猟と農耕」の関係からクマ問題を考える

つづいて、トークイベント「クマと人の共生を学ぶ」より、三面、秋山郷、阿仁のまタギ文化を長年調査し精通する、東北芸術工科大学名誉教授・田口氏のお話。クマ問題を「農耕起源説」に遡り解説。

#### 人間が生き方を変えたとき

日常の中にクマが走り回っていることが当たり前になりました。なぜこういう状況になっているかを考えなくてはいけないと思います。これまでも、人間と自然の相克という問題は起こってきました。とくに人間が生き方を変えたとき、自然はそれに対して反応します。その反応を現代人は初めて体験をしている。

例えば、縄文が終わる弥生になっていく時代。歴史の教科書では、狩猟採集の段階から農耕の段階に入ったと説明します。縄文時代の遺跡はたくさんありますが、ほとんどが現代という中山間地域に集中しています。要するに、平野部より標高が50〜300メートル

とっています。

「自助」としては、クマを知る、クマ対策を知ること。行政職員が一人一人のボディガードをしながら歩くことはできませんので、事故に遭わない行動を皆さん各自で取っていただく。それと、ご自身の土地にある誘引物の除去・管理は急務です。行政が各自のお家を訪問して、これを切りましようか、ゴミを片付けますね、とはできませんので、皆さんでやっていただきたい。

「共助」としては、通学路のまわりの藪を刈り払うのは、地域の出合い作業になるのかなと思います。栗や柿の木を切る、実をもぐの一人で作るのが難しければ、集落の方に手伝っていただく。それと大事な情報は情報共有です。あそこクマが出たよ、気を付けてねとお互いに声をかけ合いましょ。

「公助」としては、県や市町村でクマの捕獲をします。出没対応もします。対策事業として、伐採や緩衝帯整備事業など、さらに調査研究を進めていくことになるかと思えます。

秋田では、いろいろな時代を経て、クマとの距離がすごく近くなっていく時代ですけれども、衝突をしないように暮らしていければと思っています。どうぞこれからもよろしくお願いします。

## 田口洋美

ル上がった所。しかも河川に沿ってあるわけです。縄文の晩期には急激にそこから集落が消えていきました。どこに集落が増えていくのかという点、丘陵部・平野部・海岸線に近い平地です。狩猟採集の日々から、プラス農耕の日々になり、ドラスチックに暮らす場所や自然の使い方が変わりました。

今起こっているクマの問題にとって重要なのは、この「狩猟と農耕」の関係です。宮本常一という僕らの先生が農耕起源説について、農耕は、狩猟採集の延長に生まれた、と書いています。それは正しいと僕は思っています。

#### 狩猟と農耕の相補的關係

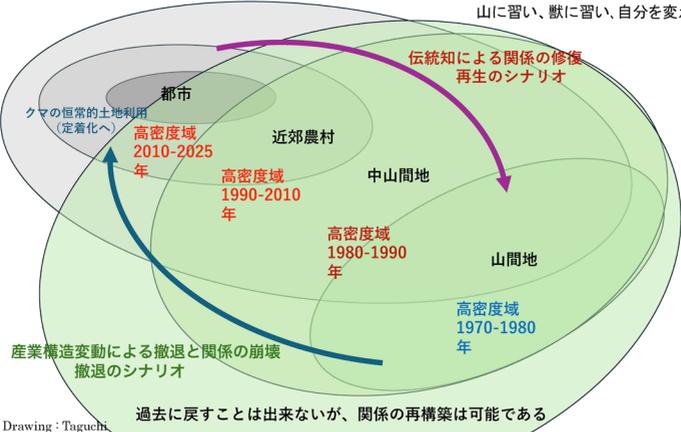
農耕をするには、自然を一回壊します。なぜなら、自然の状態の地べたには植物群落があり、農耕はそれを一回剥き出しにする。そして田んぼや畑に切り替え、お米や芋や雑穀などを栽培します。人口は増えますが、自然を改変して、人間に都合のいい作物をつくるフィールドにしたとき、何が起こるか。

#### 農耕と狩猟の持続性

僕はアフリカやシベリアも歩いてきました。動物が捕れなくなったら、プロの猟師たちは何をするかというと、動物が絶対に来る場所があるんだよって、にやつと笑うんです。森には斑がある。有用な資源には密度の濃い、薄いがある。ある所に動物が集中的に寄ってくる。いざとなればそこへ行くこと必ずシカが寄ってくる。イノシシが寄ってくる。クマが来る、そういう場所を猟師は知ってい

攻めてくる森=撤退する人為 ⇒ **ベア・アウェアネス (Bear Awareness)**

山に習い、獣に習い、自分を変える！



Drawing: Taguchi

る。そうすることによって、動物を安定的に確保できる。それを何万年も繰り返しているうちに農業になっていく。つまり、斑を人為的につくることで資源を誘引する。

狩猟者にとって農耕者のそばに居ることは、一年中、動物を獲ってそれを利用できるという狩猟の持続性を手に入れることができる。農耕者にとっても、狩猟者が害獣を獲ったり、追ってしてくれるので、収穫の持続性が担保されます。結果、狩猟者と農耕者、お互いがウインウインの関係となる。物理学の法則では「相補性」といいます。

都市部のまわりに近郊農村があつて、その外に中山間地域があつて、その奥に山と森の世界がある。それがきちんと機能してきたから、都市に野生動物は入ってこなかった。つまり山人や山子、山住の人々の生活がそこにあることで守られていたわけです。

ところが、その構造を評価もせずに壊そうとしてきた。その結果としてこうなっています。誰が犯人かといったら、われわれ自身なんです。

われわれは山間地から撤退を始めました。拓けるところまで拓いてたくさんの農地を手に入れ、生活を豊かにした。近世末あたりか

さんたち自身です。

「そろそろ山の獣の餌になってもいいころだな」

福島では野生動物が放射能汚染されて摂食制限や出荷制限がかけられています。放射能のレベルがまだ下がっていないから食べないでください。ところが、猟師さんのなかにはイノシシを獲って焼却するのはかわいそうだと食べる。汚染されている個体を食べているんです。猟師さんは資源利用を続けようとしています。「命を奪う責任を取りたい」というのです。

そういう猟師が福島の浜通りに行くと、何人もおられると聞いています。

われわれの歴史的な野生動物との関係性は、お互いの命の交換だった。『マタギ―森と狩人の記録』という僕の本の中で阿仁の根子の村田佐吉さんという老猟師は、こういきました。「マタギはしゃ、獣を殺す。殺した獣の肉だの毛皮を金に換えて商売した。それで家族食わしてきたともしや。食べもしたども、獣がいながら今こうしてオラあんだに語ってやれる。生きててもこれたすな。オラの体半分は親がもらったす。あと半分は山の獣がもらったす。親はオレを一人前になるまで育ててくれたともしや、一五過ぎでからは山に育ててもらったよなもんなの



田口洋美『マタギ―森の狩人の記録』慶友社 1994年

しゃ。だから、体半分は山がもらったと思つてるすな。私はもう九〇過ぎだものな。そろそろ山の獣の餌になつてもいいころだすな」(田口洋美『マタギ―森の狩人の記録』慶友社 1994年・324-325p)と笑っていました。そういう感覚です。

だから、駆除は狩猟じゃないんです。駆除は取り除く行為、排除を意味している。殺生をして処分することを意味している。このシカ類、70万頭、要らない、燃やせ。われわれは本当にそれで納得しているのでしょうか。

### 死人に口なし

われわれはもう野生動物に包囲されています。僕は山形に18年いましたけれど、山形の蔵王に登って山形を見下ろす。そうすると、まわりの山にはクマがいて、サルがいて、イノシシやシカがいる。真ん中で人間だけがくつついて、和気あいあいと暮らしている。この生活はいつまで続けられるでしょうか。

ら海外との貿易関係が盛んになって、近代産業社会には、平地型の都市型の生活に変わった。人の労働力投資を田んぼや畑や森から、平野部の工場や会社という組織に投入した。バブル期にはこの傾向が決定的でした。

### 狩猟と駆除の違い

狩猟と農耕は互いが支え合っており、相補的な性格を有するがゆえに、持続的に補い合う関係をつくりだせた。このバランスの崩壊は人間と自然の関係の崩壊を促した。人間と自然の関係性は、これらに代わるアプリケーションを求めている。つまり、われわれはもう自らは耕していない。耕していた時代は人間が圧力をつくりだし野生動物を抑えていた。でも、今はそうではない。では、どうしたら圧力がつくられるかという話になるわけです。

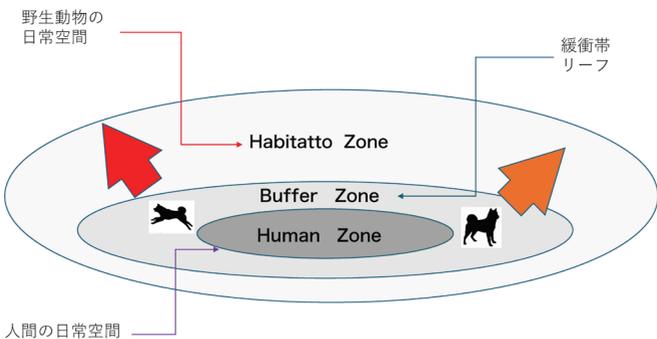
「狩猟というのは資源利用だ」と先ほど申し上げました。「駆除」は、邪魔なものをその場から追い出し、除ける行為で資源利用はないです。有害駆除や緊急避難措置で捕られた動物の多くは捕殺され焼却されています。イノシシは年間約60万頭捕らわれているし、ニホンジカもエゾシカも約70万頭とか。1年間に120〜130万頭はイノシシやシカを捕殺しています。捕殺していますが、誰も食べない。今、一生懸命、動物を食べているのは誰かという、その動物たちを駆除した猟師

野生動物が都市に入ると、最近長期滞在型になってきています。10日とか2週間は平気です。なぜかという、われわれが抵抗しないからです。抵抗したとしても、そのメッセージが彼らに伝わっていない。殺したらメッセージは伝わらないですよ。死人に口なしですから。

人間による、野生動物への圧力がなくなつていくという話を、僕に最初してくれたのは新潟の三面の小池定蔵さんでした。普段は、一切無口のおじいさんです。僕が三面に通っていたのは、24から27歳くらいですが、クマ狩りで落つて顔に傷ついてね。その定蔵さんが畏でタヌキを捕ってきて、「おい、田口、タヌキ食うが」って。タヌキを解体しながら「世の中はもう止まらんぞ」って。「こういう村はなくなつていくんだ」。三面だけでなく日本中なくなると。クマが増えるに決まっています。

阿仁の比立内に松橋旅館という旅館があります。昨日もその娘さんとコーヒーを飲みながら、あんなに昔からクマが増えるつていつていたのに、誰も聞いてくれなかったね。つて。「まだいつてんの？」つて。「まだいつてんだ、明日もいつてんの？」つて。「クマ問題を考える野生動物生息域拡大期のリテラシー」という僕の本は9年前に出した本で

ゾーニングは野生動物を捕殺出来る、出来ないの空間区分ではない。むしろ野生動物への対応を殺処分のみ頼るのではなく、空間で棲み分けるための棲み分け区分であり、対応の仕方（関係表現の方法）の分布を表したものである。



す。マタギや山の人たちの話を聞いていけば、こうなることは分かっていた。どこで象徴的な事件が起きるかというだけの話でした。官僚の人にも、どういう対策を取るべきかという話までしたけれど、結果的には誰も聞く耳を持っていませんでした。

ゾーンディフェンス

中山間地域の力がどんどんなくなっていき隙間ができました。本来ゾーンディフェンスで防いでいたラインが決壊して、人間が後退していきます。野生動物はそこを奪還しにきている。自分たちが追われた場所を取り返しにきている。

これからどうしますか。野生動物に明け渡すのか、それとも新しい設計図を考えるのか。環境省も提唱している「ゾーニング管理」をやっていかないと、われわれはこの日常をずっと続けることになります。2025年はひどかった。23年にも起こりました。24年はちよつとダウンしましたね。2026年もまたダウンするでしょう。でも、再来年やその後はどうなるか分からない。

今、僕が仲間と取り組んでいるのは、ディフェンスを銃器ではなく、罠とAIで行おうというものです。なぜ、罠で捕獲するかというと、罠は捕まった後に、捕まった個体を仲

間が見ることになるんです。例えばシカが5頭いて、1頭が罠にかかると、後ろの4頭は警戒して少し違うコースで移動します。変えたコースの先で、別の個体がまた罠にかかる。するとだんだんその場所が嫌になってくる。それを繰り返して、動物たちにここに来ると損だよということを教えるわけです。メッセージ性のあるリアクション、これが重要です。教えることでゾーンが守られます。マタギの罠の匠について、今一度考えたいと思います。秋田ではAI搭載ドローンを用いたクマ出没対策システムも準備中だと聞いています。若い猟師さんたちが、安全な狩猟や駆除ができるようサポートするためにAIを活用できないかという議論も始まっています。



トークイベント「クマと人の共生を学ぶ」。登壇左より近藤麻実氏、田口洋美氏、石川直樹氏、角幡唯介氏、服部文祥氏

岩尾別の母なのか

石川直樹

昨夏、全国的に熊の出没問題への関心が高まる中、北海道の知床半島、羅臼岳の岩尾別ルート上で登山者がヒグマに襲われて死亡する事故が起こった。二〇二五年八月一日午前一一時ごろ、羅臼岳から下山中の二人パーティのうち、一名がヒグマに遭遇し、登山道脇の茂みに引きずり込まれて亡くなった。

翌八月一五日の捜索中、現場付近で母グマと子二頭の計三頭の親子熊が見つかり、射殺された。遺留品のDNA分析の結果、捕獲したヒグマと事故に関連した個体が一致したことが証明され、近くには被害者の遺体もあったという。

この件が、地元には大きな影響を及ぼしたのは、ヒグマの高密度生息地である知床において、半世紀以上ものあいだ一度も事故が起こってこなかったからだ。知床ではシーズンになれば毎日のようにヒグマが目撃される。かくいう自分も、幾度となく知床の山や海でヒグマを目撃してきた。

世界自然遺産に登録されている知床半島は、観光客も地元民も含め、人とヒグマが偶発的に接触しやすい環境にあった。な

のに、近年、人間がヒグマに襲われた事例はなく、知床のヒグマは人間を襲わない、などと言われることさえあった。そんな知床で、しかも登山者に人気のある羅臼岳で、人がヒグマに襲われた。東北での出没ニュースが巷を賑わせている中、熊と親和性の高かった知床でもついに事故が起きたのか…、と地元でも衝撃をもつて受け止められたのである。

ぼくは羅臼岳にこれまで六回ほど登っており、二〇一七年秋に羅臼岳に登った際、最も間近でヒグマに遭遇している。

その日、ぼくは標高一六六一メートルの羅臼岳に登頂後、頂上から少し下ったところにある羅臼平という場所ではキャンプをする予定だった。テントを張った後、隣の三ツ峰に登って、北方領土の国後島などを遠望して写真におさめ、再びテント場に戻ろうとしたところ、眼下に、ぼくのテントのすぐ近くをうろつくヒグマの姿が見えた。

そのヒグマは、近くのハイマツ林の中に体を埋めながら松

ぼつくりを無心に食べ続けていた。ハイマツはちようど熊の背丈ほどの高さがあり、動き続ける熊の体がハイマツの中から見え隠れしている。

「まい、つたな……」とぼくは独り言を言いながら、少しずつテント場に向けて下つていった。人間の気配を察知したら熊が逃げてくれるかもしれない、と期待をしたが、熊はまったく気に留める気配もなかった。

すでに日が暮れかけていて、テント場に泊まらずに下山するのもリスクが高く、テントで一泊するしかない」と決心し、「おい！」「おーいー」と半ばお願いするように何度も大声をあげ続けた。それでも、熊は退いてくれない。そのとき熊がいた場所は、テントから三〇メートルほど離れたハイマツの中である。

ぼくは持参した鍋を取り出し、トレックキングポールで鍋を思いつき叩いて、キンキンと耳障りな音をたててみた。さらに大声で「クマ、あつちいけー！」と何度も叫んだ。ぼくと熊との距離は変わらず三〇メートルほどだった。

ぼくはドラマーのように激しく鍋を叩きまくったのだが、それでもその熊は一向に動かなかつた。ぼくのほうを一瞥した程度で、再び松ぼつくりに夢中になっている。ぼくは、この熊が子連れではないことを確認し、さらにテント場とは反対方向にゆつくり動いていくのを見て、もう観念してテント泊を決行し

ことを聞いた。

ぼくはふと気になって九年前に羅臼岳で撮影した動画を確認した。そこに写っていた熊は、先日の事故後に駆除された「岩尾別の母」と特徴が完全に一致していた。人を襲った個体は、パング目と両脇の白い毛が特徴で、一歳になる成獣のヒグマとされる。二〇一七年当時は三歳の亜成獣で、体つきにも矛盾がなく、人間を恐れない性格という面でも似ている。もしかしたら、自分は件のヒグマと同じ個体に出会っていたのだろうか。

あの熊は、ぼくを襲わなかつた。匂いが出るような食べ物はテント場から離れた鋼鉄製のフードロッカーにしまってあつたし、そのときの彼女は子連れでもなく、松ぼつくりで腹が満たされていたからテントや人間に関心を示さなかつたのかもしれない。ぼくは確かに彼女に声をかけた。おれに気づいてくれ。おれは人間なんだぞ。人間がここにいるんだぞ、と。そして、ゆつくりと振り返つてぼくを見つめたその眼は、穏やかそのものだった。

昨夏、被害に遭つた二六歳の男性登山者は、標高約五六〇m付近の見通しの悪いカーブに差し掛かつたところでヒグマと鉢合わせしてしまった。お互いに驚いたことだろう。そこはアリの巣穴があつてもともと熊の出没が多い場所だった。登山を楽しんでいた人間も、子連れで餌場を訪れていた熊も、どちらも悪くない。

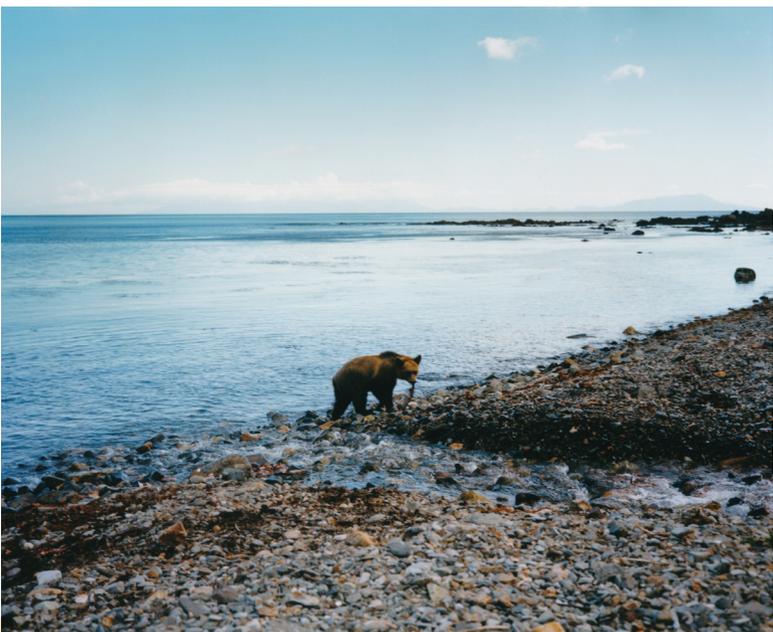
たのだった。

夜、風の音が熊の足音に聞こえて寝つきが悪かつたのだが、いつのまにか寝袋の中でぐつすり眠つて朝を迎えた。(熊に襲われなくてよかつた……)と安堵してカップラーメンをすすつてテントの外に出ると、すぐそこに熊の糞があつた。しかも、乾いたものではなく、まだ湿つており、おそらく数時間以内に出したばかりだと思われた。糞を枝でほじくつて、匂いを嗅ぐと、臭さがなく、松とセージを合わせたようないい匂いがした。寝袋の中で聞いた気がした風音に交じつた獣の足音は、夢ではなく現実だつたのではないか。

あたりを見回すと、いた。ヒグマが昨日とは別の方角の三〇メートルほど先のハイマツから顔を出したのだった。ギョツとしたが、昨日と同じように、ぼくにまったく関心を示さず、松ぼつくりを食べ続けている。ぼくは熊を視界の端に入れないがテントを撤収した。そして、長居は無用と下山を開始したのだった。

このときのヒグマとの遭遇は九年経つた今でも強く印象に残っている。昨夏、羅臼岳で熊による事故が起こつた時、最初に思い出したのが、あの熊だった。事故の直後、ヘリで登山者を救助しながら捜索活動にも携わつた旧知の役場職員男性と話した際、人を襲つた熊が、たまたま人間に極端に関心を持たない個体で、現地では「岩尾別の母」という名で呼ばれていた

熊は、山の主として畏敬をもつて扱われる動物でありながら、ときに害獣として人間の敵とされる。熊にとって人間も同様の存在だろう。駆除でもなく保護でもない、共に生きる道が必ずある。あの一夜を過ごしたぼくには、そう思えてならないのだ。



福島県南相馬市小高に住まう知人から、そこへ数週間滞在する機会をいただいた。以前から関心を寄せていた地域だったので、殊更に嬉しい。二年前、初めてその場所を訪れた時、私は高揚感で胸を満たしながら馬の後をひたすら追いかけていた。

福島県の太平洋沿岸北側地域では、相馬野馬追という行事が伝統的に行われている。野馬を捕らえる軍事訓練が起源とされ、五つの郷から総勢約四〇〇騎の騎馬武者が一同に会す様は、戦国の景色を見ているかのような。野馬追行事の最も重要な締めくくりにするために、騎馬たちは街を闊歩しながら相馬小高神社へ向かう。かつての小高城跡でもあるこの境内に野馬を放ち、素手で捕まえて奉納する神事は野馬懸と呼ばれる。現代の、絵馬奉納の原初の姿である。

初めて見る行事はきらびやかに感じた。野馬追に先立って披露される相馬流れ山踊では、その年当番となった郷の女性たちが、陣羽織に陣笠を身に着け、扇子を金色に翻しては悠然と踊る。もともとは農民の田植唄であったものが、相馬中村藩の軍歌に転じた。今では雲雀ヶ原祭場という広大な舞台で何万人という観客に見守られながら、女性たちは踊りによつて祈りを捧げる。

今年一月、北東北の大雪を逃れるように小高に向かった。何度か話すうちに仲良くなった地元の女性に、今年は小高郷の年だから参

解除されてから一〇年、小高区の人口は、震災前に比べると半数に満たない。

ある地元の男性は、県外に住む知人から、小高の様子に対して「地方の過疎化なんて、どこも同じだよ」と言われたことが忘れられないと言う。それは、この地が直面してきた問題をひどく矮小化した言葉だ。この地が受け続けている痛みもまた、目につくことだけでは決して語り得ない。

あの日、馬を追いかけて辿り着いたJR小高駅で、再び帰りの電車を待つ。



相馬野馬追：一連の行事は5月末の土曜から3日間行われる。写真は神旗争奪戦。空高く打ち上げた旗を野馬に見立てて捕らえる。(2024年撮影)



JR小高駅前の街並み。右奥にある時計の横には、空間の放射線量を測るモニタリングポストが設置されている。(2026年撮影)

加してみない、と相馬流れ山踊にふいに誘われた。伝統を外の人にも伝えていくのが大事だと思うからと聞いて、深く納得はするものの、この重大さに腰が引ける。同じ町内に住む別のお母さんにも相談してみると、ああ今年是小高なのねと思いのほか淡白だった。不思議に思いつつ、一緒に参加してみませんか誘ってみると、思いもよらなかったという風に、うちは騎馬を出すからねえと目を丸くされた。

一人では着れない重厚な甲冑を着付け、出陣前に興奮で暴れてしまう馬を諫め、各家が持つ家紋が入った旗指を用意して……格式高く勇猛な騎馬の出陣には、家族総出でそれを支えることが必須となった。以前お家の甲冑を見せてもらっていたのに、想像力が足りなかった。目に見えない文化の厚みが、会話の端々から滲み出てくる。

千余年の歴史を誇る相馬野馬追と、それを受け継いできた人々のいる小高だが、二〇一一年三月一二日、福島第一原子力発電所の爆発により、南相馬市含む九つの市町村地域と共に、帰還することの叶わない場所となった。

長靴のまま出ていったんだ、すぐ戻れると思って……そのまま五年が経った。

いつもはおしゃべりな地元の魚屋さんが静かに言う。居住制限が

長い間、福島を遠いところだと感じていた。すべては過去のことになったと思っていた。

そおーまああなーがれやーあーま ナーあーエエナー  
あーあーエ

いま、伸びやかな節回しの向こうに、いつかの景色が見える。ここに生き続けてきた人が見てきた景色。愛しさも痛みが共存するその景色の中で見えるものを、私もまた、眼差ししていたい。



秋田での滞在が始まる前、私は「人間は、風景を構成する要素の一つである」といつも信じていました。今までの考え方に疑問を抱くこと、ましてや概念の起源を辿ったことはなく、ただ現実として、そして絶対的な真実として捉えていました。しかし、秋田に暮らす人々との交流がこの信念を見つめ直すきっかけとなったのです。彼らは自分たちの暮らす土地や習慣、時には日常生活について語ってくれ、結果として、私の秋田でのあらゆる経験は彼らの物語を中心に展開していくこととなります。私の旅は、まず文化創造館のワークショップ会場から始まりました。参加者は「風景の記憶」として秋田にまつわる思い出の写真を持参し、針と糸を用いて端切れにその記憶を縫い留めながら、各々の物語を共有してくれました。針、はさみ、糸、そして端切れでいっぱい作業台で、私は彼らの物語に歩み寄るために、言葉だけではなく、イメージや仕草、手縫いの跡にも耳を傾けることを学びました。そうして耳を傾けていた時間は、私自身が秋田の様々な場所を訪れた時間と同じくらいのものでしたように思います。

私は美術館、歴史的建造物、田園風景、お寺、川、森、そして海など、県内三〇箇所以上の場所を訪れました。仙北市にある雲巖寺を訪れた時のことです。中庭で小さな仏像を見つけました。それはまさに、ある一人のワークショップ参加者が私に共有してくれた、風景の記憶でした。彼女と同じ視点から写真を撮り、彼女の見た風

景をなぞる。その行為によって、私たちと場所との間に生まれた繋がりがあり、まさに同じ風景に縫い留められていくような感覚を覚ええました。実はこの日だけではなく、村の入り口を守る道祖神である横手市末野のシヨウキサマに会った時にも同じように心が満たされるのを感じたのです。

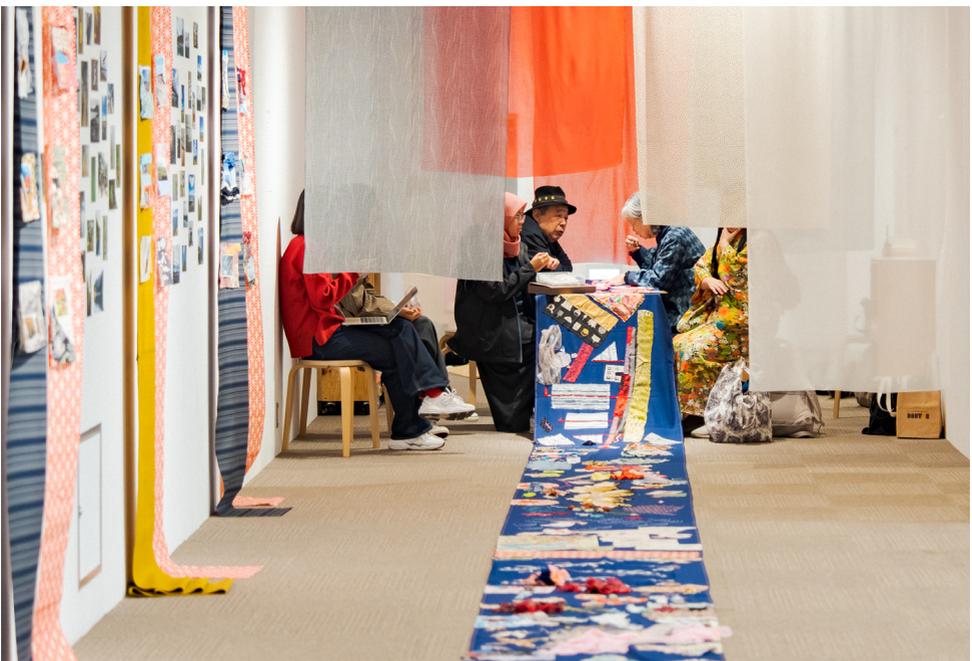
私の記憶に最も強く残るのは、風景そのものではなく、風景へと導いてくれた物語の数々だということに気がつきました。

たとえるところしたら、秋田の風景を理解しようとする過程は一枚の布を織っていくような感覚です。大小関係なく、あらゆる出来事が物語という一つの布を織り上げるのに必要であり、重要なのです。繰り返し名前が挙げられる場所―木内百貨店、千秋公園、角館など―も、極めて個人的な記憶として名前が挙げられる場所―由利本荘の橋、阿仁小沢鉾山からの川の景色、男鹿の海岸の断崖、そして能代の自然林の中の小道など―も、どれも違いはありません。

秋田での旅は、私の視野を広げ、風景の記憶に対する新たな視点をもたらしくれました。「人間は、風景を構成する要素の一つである」。冒頭で述べた考えは今でも変わりません。しかし今は、「風景もまた、人間を構成する要素の一つである」という新しい認識を持ち合わせています。相互作用は一方からだけでは成立しません。人間と風景は互いに形づくり、影響し合いながら存在しています。



「風景のタペストリー」ワークショップ参加者の作品（秋田市文化創造館で遊んだ記憶）。



成果発表展につくられた共同制作スペース。



味はカスタード、抹茶、チョコ、いちご、ブルーベリー、ゴマ、栗、かぼちゃ。季節によっても変わる。



お母さんは4代目。創業当時は飴玉などを売る行商だった。



ショーケースに並ぶシュークリーム。1日150個ほど作る。

八年前の春、縁もゆかりも無い秋田での生活が始まった。大学に籠り、ひたすら手を動かす。同じ作業を長時間続けていると、ハツと糖分切れを感じる瞬間がある。そんな時、決まって行くのが「わたゆう」だった。大学から一〇分ほど歩き、坂を上がつていくと赤い屋根が見えてくる。

お店の扉を開けても店員さんはいない。その代わり、シュークリーム達がショーケースの明かりの中で身を寄せ合うように並んでいる。

レジの上の呼び出しボタンを押すと、お母さんが工房からお店の方に向かってくる。店内を見渡すと、美大生の展覧会のお知らせや、小学生からの手紙が目に入る。ここで生まれる会話が聞こえてくるようだ。

「はい、いらっしやいませー」

「カスタードと…うーんゴマをください」

ボタンを押す前に決めたはずなのに、最後の最後まで迷ってしまう。たまにおまけでもうひとついたたくこともあって、その分重くなった紙袋が嬉しかった。大学までの帰り道を歩きながら、たまたらず一つ頬張る。サクツク、クリームが溢れ、冷えた身体に染み渡る。これでまた鉛筆を握れる。

文：白田佐輔 写真：船橋陽馬

ぼくの好きな秋田①  
秋田市新屋の「わたゆう」



成果発表より、フィトリアニ氏が訪れた県内各地の風景（カラー写真）と、同じ地域の昔の風景（モノクロ写真）が並ぶ。



ワークショップ参加者の作品（仙北市の雲巖寺を訪れた記憶）。



アーティストトーク 左：聞き手の佐々木蓉子氏（弘前れんが倉庫美術館）、中：ラクミ・フィトリアニ氏

写真：星野慧

クリエイター・イン・レジデンス 2025  
「風景のタペストリー」ラクミ・フィトリアニ

滞在期間：2025年9月-10月

文化創造館は開館以来、多様な分野のクリエイターを招き、市民と共に創造力を刺激する実験的な活動を実施してきました。今年度は、国内外あわせて306件の応募の中から選ばれたアーティスト、ラクミ・フィトリアニ氏を招き、創造館と共に、地域の人々と関わり、創作活動に取り組みました。

フィトリアニ氏は、インドネシアのバンドン市南部の小さな町・パンガレンガンに住むランドスケープアーキテクト兼テキスタイルアーティスト。滞在期間には、創造館に集う人々が語る「風景の記憶」に耳を澄まし、秋田各所を訪れ「風景の記憶」を辿り、集まった「布」をみなで縫い合わせて「風景の物語」を織り成しました。



●ラクミさんの滞在と創作を記録した動画や、佐々木蓉子氏によるレビューはこちら

<https://akita.cc.jp/article/cir2025review>



# “みんな”で “バラして” “つくりかえる” ワークショップ

(一緒に考える人：岩沢兄弟)

文化創造館を訪れる来館者・クリエイター・スタッフをつないでいくのは、什器・家具なのかもしれない。

1月31日(土)・2月1日(日)の2日間、「みんな」で「バラして」「つくりかえる」ワークショップを開催した。秋田市文化創造館は、市民の「やってみよう」を後押しする活動拠点として2021年に開館し、今年で5年目を迎える。開館当初から、来館者や利用者、事業に関わるクリエイターの活動を支えてきたのが、館内の什器・家具である。今回のワークショップは、それらをアップグレードしていく試みとして実施した。

文化創造館の什器・家具は、主に木工造りでつくられている。これは初代館長・藤浩志氏の「何かつくりたくなる、活動したくなる想像力を掻き立てるには、ツツコミを入れたくなる」「ボケた(完成しきっていない)」「空間や什器が大切」という思想のもと整備されたものだ。多くの文化施設では、長く・綺麗に使うことを前提とした什器が設けられる。一方で本ワークショップでは、開館5年という節目にあわせ、参加者とともに「ツツコミ(介入)」を入れていく試みとして取り組んだ。

ワークショップの監修には、「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、拠点づくりを手がける岩沢兄弟を迎えた。提案されたのは、家具を「バラす(解体することから始める設計だった。新しい什器のアイデアを考える前に、共同作業で解体し、素材に立ち返るというアプローチである。

実際にチームで解体を進める中で、参加者はあることに気づく。文化創造館の什器の多くは、木材同士がビスのみで固定され、電動工具で簡単に取り外せる構造になっていた。思想だけでなく、実作業としても「ツツコミが入れやすい」設計がなされていた。

また印象的だったのは、多世代が自然に関わり合う光景である。72歳の参加者と20代の参加者が作業を共にし、小学4年生には70代の方が工具の使い方を教える場面も見られた。初日にグループワークを行っていたこともあり、スケッチやアイデア出しの場面では、自然と意見交換が生まれていた。什器・家具のアップグレードは、今回で完了ではない。「解体から始めること」「みんなバラすこと」を通して、ここからがスタートとなる。運営側だけの単発的な更新ではなく、来館者とともに、使いやすさや楽しさを

育てていくプロセスとして、今後も動き出していく。什器・家具を通して、文化創造館が「利用する場所」を超え、来館者と一緒に育て、愛着を持ち続けてもらえる場となることを願っている。

文：勝谷俊樹 写真：星野慧



文化創造館の使い込まれた什器・家具と、岩沢兄弟のモノとアイデアを組み合わせた作品。

## ① レクチャー



岩沢兄弟(左:兄のひとし氏、右:弟のたかし氏)による、活動事例や作品の紹介。

## ② 解体



グループごとに什器・家具を観察、スケッチし、バラしていく。

## ③ 分類



バラした木材を素材として活用するために寸法を測り、長さを書き込む。

## ④ 設計



文化創造館の困りごとを解決するアイデアを描く。



解体し、素材に戻り、また次の什器・家具や制作に活用されていく。

“みんな”で “バラして” “つくりかえる” ワークショップ (一緒に考える人：岩沢兄弟)

日時：2026年1月31日(土)、2月1日(日)  
各日13:00-15:00

会場：秋田市文化創造館2階 スタジオA1  
主催：秋田市  
企画・運営：NPO法人アーツセンターあきた

2日間のワークショップでは、家具を直すのではなく、一度「バラバラ」に解体しました。「なぜこの形なのか?」「どうすればもっと使いやすく・楽しくなるか?」解体と分類を通して、既製品を意外な方法で組み合わせる「見立て」と「アイデア」を考えました。



執筆者プロフィール

黒木美佑(くろき みゆ) 一九九七年、三重県四日市市生まれ。コンビナートの煙突を見て大きくなる。「おおきな世界とごく個人的な私のからだ」を記録する日記をつけるのが日課。秋田市文化創造館の受付から秋田の町を見てもうすぐ四年目。角幡唯介(かくはた ゆうすけ) 一九七六年、北海道芦別市生まれ。極夜に北極探検や犬橋で旅をするなど独創的な活動で知られる。著書に『極夜行』、『地図なき山日高山脈49日漂流行』、新刊の文庫に『裸の大地 第一部 狩りと漂流』、『エレベーストには登らなし』。

塩野米松(しのお よねまつ) 一九四七年、秋田県角館町(現仙北市)生まれ。絵本や、聞き書きによる著書多数。「木のいのち木のころ(天・地・人)(西岡常一、小川三夫との共著)、『手業に学べ心』など。全国各地を旅しながら伝統文化・技術の記録に取り組み。

星野慧(ほしの さとる) 二〇〇一年、北海道札幌市生まれ。高校から写真を始め。国際教養大学への進学を機に秋田へ移り住み、卒業後はフォトグラファー・ビデオグラファーとして北東北を中心に活動している。

小野地鐘(おのち ひとみ) 二〇〇一年、神戸市生まれ、秋田市育ち。創造館にて広報や自主事業のアシスタントを担当。ピアノや歌に親しみ、果内を中心に演奏活動を行っている。ぬいぐるみやつくりや料理も好き。

三浦美和子(みづら みわこ) 一九七六年、由利本荘市生まれ。秋田魁新報社にて文化部、整理部、こども新聞等を担当。二〇二三年にフリーランス記者となり、ジェンダー、セクシュアリティ、人権をテーマに発信。ウェブメディア「voice」の筆者、責任者。

服部文祥(はっとり ぶんしょう) 一九六九年、横浜市生まれ。山岳雑誌「岳人」編集員。K2登頂や剣岳・八ツ峰北山、

黒部別山東面の初登攀といった実績をもつ。『北海道犬旅サバイバル』、『サバイバル家族』など著書多数。最新刊『本日の登山の話しよう』。

近藤麻実(こんどう あさみ) 一九八四年、三重県津市生まれ。岐阜大学農学部獣医学科(現在の応用生物科学部共同獣医学科)を卒業。二〇二〇年に秋田県自然保護課に着任し、ツキノワグマの被害対策や正しい知識の普及啓発に取り組んでいる。

田口洋美(たぐち ひろみ) 一九五七年、茨城県那珂郡東海村生まれ。狩猟文化研究所代表。東北芸術工科大学名誉教授。九〇年「ブナ林と狩人の会」マガジサミット」を発起。著書に『マガギ・森と狩人の記録』、『クマ問題を考える野生動物生息域拡大期のリテラシー』など多数。

石川直樹(いしかわ なおき) 一九七七年、東京都生まれ。写真家。人類学、民俗学などの領域に関心をもち旅をしながら作品を発表。著書に『秋田(伊藤俊治氏との共著、最新刊『最後の山』。二〇二四年一〇月、世界八〇〇メートル峰一四座すべての登頂を果たした)。

中須賀愛美(なかすか まなみ) 一九九四年、広島市生まれ。主に「忘却」や「喪失」を起点としながら、いまある場所、ものごとに出会い直すために制作活動を行う。創造館の窓口業務でも、いろいろな方の視点と出会えるのが楽しみ。

Rakumi Fritani(らくみ ふいとりあに) インドネシア西ジャワ州在住。ランドスケープアーキテクト兼テキスタイルアーティスト。手芸等を用いて質感と色彩を探索する造形作品を制作し、人間と自然の関係を表現している。

杉井菜々子(すぎい ななこ) 一九九六年、秋田県生まれ。秋田公立美術大学ビジュアルアート専攻卒業。デンマークに留学し、暮らしに根付いた手工芸文化を学ぶ。「秋田市文化創造館クリエイター・イン・レジデンス2025」コードネーター。

## 浮かぶ「むぎの香」② 満ちてゆく朝「むぎの香」

秋田市榎山にお店を構えるパン屋「むぎの香」。早く起きた休日は、そのパンを指して散歩に出かける。

営業時間は8時からと書いているが実際は7時半頃から開店し、焼きあがったパンが徐々に店頭に並んでいく。

「9時ならまだ大丈夫だろう」とのんびり支度をして家を出た日には、もうすでに完売していて、その時はさつきまで布団でごろごろしていた自分を心で憎んだ。

向かう途中、山の脇を進むと見えてくる川は、強烈な朝の陽を水面に反射させ「起きろ」と言わんばかりにその光を私に浴びせてくる。

目を細めて眺めると鴨たちが一列になって泳いでいる。

緩やかな曲がり道の先に「天然酵母パン」ののぼりが風に揺れている。

よかつた、まだ開いている。店内に入り、そとと挨拶をすると奥の方から「おはようございます」とやさしい声が返ってくる。

棚にはあんぱん、チョコクリームパン、ち

くわパン、コーンパン、自家製ハンバーグパンなど15種類ほどのパンが並んでいて、みんなまるっこくてかわいらしい。本当は全部買って家に連れて帰りたい。

どれにしようかじっくり考えているところに、奥からたつた今焼きあがったパンが登場して選択肢が増える。

いつも、なんとか2、3個に絞って、お会計前にもう一度棚を向き「次に来たときはこれにするぞ」とパンたちに熱い視線を送る。

メニュー表によると、むぎの香には約40種類のパンがあり、私が出会えていない顔がまだまだいるようだ。そのすべてに出会うぞというひそかな野望を抱き、私は通い続けるのだ。

お会計の時にお店の人と少し会話をしている。声色や仕草の丁寧さがこのパンとよく似ている。

外に出て、手提げ袋に手を突っ込むと、ほのかに温かい。中からひとつ取り出す。

「克蘭ベリーとクリームチーズ」のパン、私はむぎの香でこのパンが一番好きだ。歩きながら出来たてのそれに一口かぶり

船橋陽馬(ふなばし ようま) 一九八一年、男鹿市(旧若美町)生まれ。二〇一三年から、マガギ発祥地、根子番楽で知られる北秋田市阿仁の根子集落に住む。一五年「根子写真館」、二二年「根子マガギコヒー」をオープン。

白田佐輔(はくた さすけ) 二〇〇〇年、茨城県生まれ。創造館にてリングラフ印刷機の活用プログラム「リソの日」や、誰もがその日限りの一日店主となって語り合うだけの場「カタルバー」などを担当。

勝谷俊樹(かつや としき) 一九九五年生まれ、青森育ち。秋田公立美術大学景観デザイン専攻卒業。展示制作会社を経て、現在は施設管理とイベント企画に従事。「場所・チームづくり」を軸に、自身の表現探求と他者の表現支援を両立する。趣味は都市鑑賞。好物はハンバーグとバイナッブル。

金子聖英(かねこ きよえ) 創造館で「防災」や「やっつてみたい!」をカタチにする「チャレンジマーケット」などを担当。ヒトとヒト、ヒトとモノがつかざる瞬間が嬉しい。

古谷博子(ふるや ひろこ) 一九八六年、由利本荘市生まれ。アルコール依存症当事者。二〇二二年より、ピアサポートの場「Peer club」を設立。代表を務める。現在は、秋田市内の精神科病院にて、ピアスタッフとしても勤務中。

### 創造館より

●カタルバー…毎週水曜に開催される対話の場です。一日店主が掲げるテーマをもとに、同じ趣味や興味を持つ人たちが集まり、ゆるやかに語り合います。

●リソの日…独特の風合いが魅力の印刷機「リングラフ」を有料で開放しています。

●ソウゾウカンラボ…必要な道具や素材が揃う作業スペース「ソウゾウカンラボ」に、二〇二六年四月から新しくミッションが導入されます。

文・絵…金子聖英

つく。やわらかな生地の小麦の味、克蘭ベリーの酸味、クリームチーズのほんのりとした甘さが広がって、朝の空つぽなからだが満たされていく。

食べてほしい友人の顔が浮かぶ。朝の中を並んで歩いて、川からのピカピカの光を浴びて、好きなパンを選んで、出来たてにかぶりついて。きつといい顔をするんだろな。

行きに見えた鴨たちはもうすつかり遠くを泳いでいた。

なんだか私も、今日はどこまでも歩いて行けそうだ。

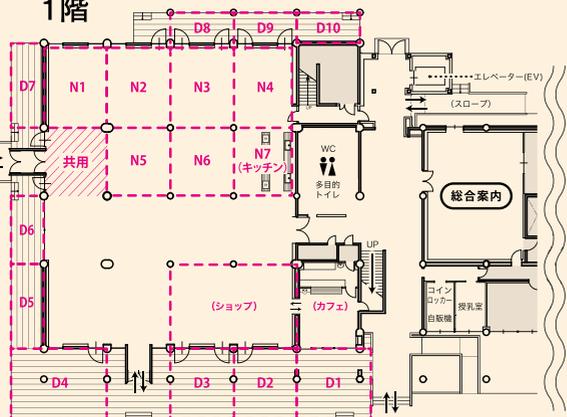


むぎの香  
〒010-0032 秋田市榎山太田町6-29  
電話：018-825-1247  
定休日：日・月曜

## スペース貸出について

秋田市文化創造館は、多様な文化活動との出会いを結び、人々の創造的な歩みを支える場です。創作や練習に励む方、新しい活動を始めようとする方の第一歩を後押しします。

### 1階



#### コミュニティスペース (N1-N7)

大きなイベントだけでなく、「1㎡」や「1区画」といった最小限の単位から借りることができます。個人の小さな展示、ワークショップなど、自分に合わせた自由な使い方が可能です。キッチンエリアでは、料理教室など食に関するイベントを行うこともできます。

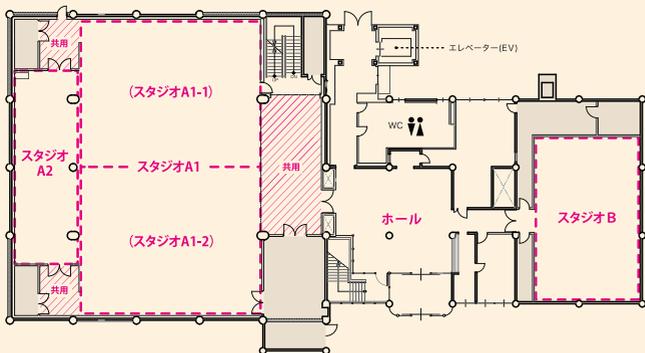
#### デスク (D1-D10)

一部区画の専用利用が可能です。

#### 屋外エリア

マルシェ、ミニコンサート、ワークショップなどの利用が可能です。

### 2階



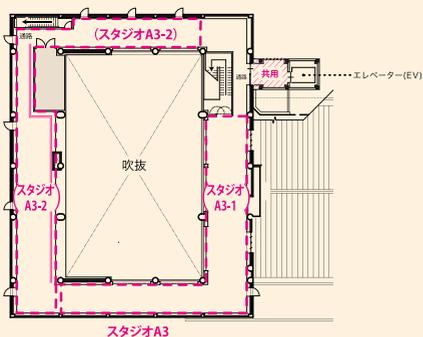
#### スタジオA

展示、シンポジウム、ワークショップ、公演、上映、滞在制作など、さまざまな用途に利用できる空間です。3つのエリアにわかれ、それぞれ単独での専用利用が可能です。

#### スタジオB

窓がなく、展示やダンス練習、会議などさまざまな用途にご利用いただけます。

### 3階



詳細はこちら



## peer cafeが「在り続ける意味」

古谷博子

peer cafeは、アルコール依存症・使用障害を持つ方のための当事者会。月に一回、コミュニティスペースとキッチンエリアを借りて、お話しと調理活動を行っています。

ここは、“同じ病気・障害をもつ者同士”だからこそ話せる、自身の近況報告や小さな相談、情報交換の場であり、そしてそれとは反対に、病気とは全く関係のない“ただのヒト同士”としてたわいのない会話が飛び交うコミュニケーションの場でもあります。

時にはギター演奏や、歌の披露も行われています。

私達当事者が、本当に気兼ねなく安心して、ありのままの自分でいられる場所、そして「克服をあきらめないための仲間」との貴重なつながりの場所なのです。

最近では、このような当事者同士・対等なもの同士による支え合いを、ピアサポートと呼ぶことも増えてきました。

うちの会も、当事者同士の相互支援の場であるため、名前をpeer cafeとさせてもらっています。

依存症という“脳の病気”の克服を続けることは、決して簡単なものではありません。それは私達のもつ病気が、完治のない病・障害であり、回復の方法は「生涯、克服をあきらめないこと」というあまりにも長く漠然とした道のりであるから。また、医療の進んだ現代でも、病気への偏見や誤解が、一般社会の中に根深く残っているからでもあります。

参加者全員が専門治療機関での医療サポートを受けながら、また、こういったピアサポートの力を仲間と分け合いながら、日々の取り組みを続けています。

「ここ来ると元気になる」「みんなの顔みたら安心した」「もう一か月、次のpeer cafeを目標にして、頑張ってる」

そんな仲間の言葉が、この3年間の活動を続けてくる原動力だったと思っています。もちろん、イチ当事者である私自身の想いも、みんなと全く一緒。

本当に馬があうものです。

自分達の大切な居場所を、これからもみんなで楽しみながら、作り続けていきたいです。

「今日、いつもの第一水曜だからやってるかなと思って。もしかしたらみんなに会えるかと思って来てみた」

先日のpeer cafe開催日、遅れてやってきてくれたG君のこの言葉が、peer cafeの“在る意味”と“在り続ける意味”を語ってくれていたような気がしました。

